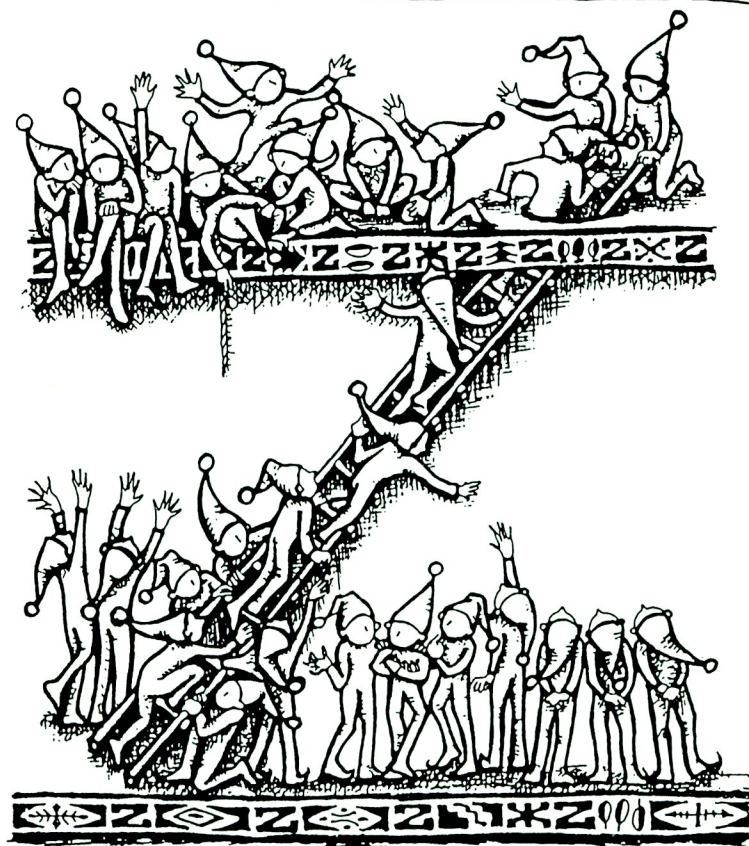
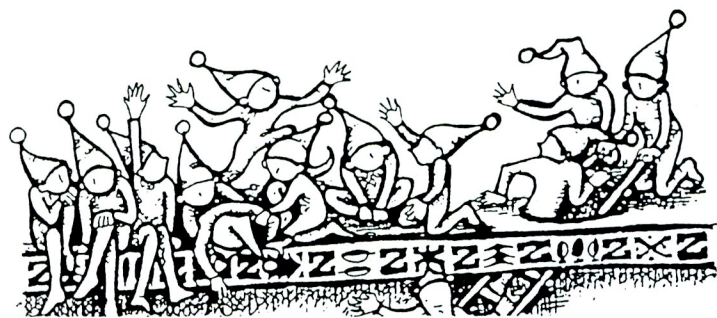


第 17 回

川柳 Z 賞入選作品集



Z 賞選考委員会



川 柳 Z 賞入選作品集 目次

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
山本	宮川	渡辺	木本	藤村	なかはら	峯見	徳永	島道	広瀬	坂東	白藤	岩崎	情野	大谷	樋口	板東	柴崎
礫子	蓮子	裕子	朱夏	沙耶	いこ	子	政二	代	ちえみ	乃理子	海	真里子	千里	晋一郎	仁	弘子	昭雄
京都市	新潟市	北海道	和歌山市	豊中市	名古屋	大津市	守山市	青森市	仙台市	加古川市	西宮市	黒石市	姫路市	高松市	四日市市	香川県	青森県
10	10	9	9	8	8	7	7	6	6	5	5	4	4	3	3	2	1

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
榊原	山本	瀧	横澤	高鶴	野々	渡辺	姫乃	福力	鎌田	桐越	小杉	鷺谷	山本	神谷	伊藤	西秋	斎藤
れい子	忠次郎	正治	あや子	礼子	圭子	和尾	彩愛	明良	京子	千繪	美恵	美津子	三香子	三八朗	紀子	忠兵衛	はる香
姫路市	東京都	相模原市	八戸市	和光市	和歌山市	愛知県	豊中市	岡山市	仙台市	北海道	夕張市	秋田市	高知県	名古屋市	札幌市	八千代市	小樽市
19	19	18	18	17	17	16	16	15	15	14	14	13	13	12	12	11	11

芽吹かんと水をたらふく飲み込みぬ
足跡もけもののかたち冬銀河
なきつくし青をつくして月下の影は
曇天の鴉かぞえて泣き笑い
一灯を生きたらぬかん点灯夫
泣き道化芒ヶ原をまっしぐら
ところどころに灯りともして飯を食う
炎天の影よ何かが尽きるまで
漁り火ともるぼくのいのちと呼応して
踊りつづける次郎の掌にも雪だまり
白蕪や風の話の尽きぬ父と
展げれば父の海図の深き呼吸
父はまた波と交わる神懸かり
父は子の梯子をはずす夏銀河
木枯らし鳴って父ことごとく囚われる

みぞれ降る父の行進曲流れ
芒原すつぱり父の背を隠し
笑い袋を覗くと太き骨ばかり
雲梯を家族一列進むべし
雨上がりみないつせいにけものの貌に
秋雲の速き流れよごろりと木馬
血の濃さへ傾く椅子の夕焼け小焼け
鼻すじは道化どこまで青空か
ひるがえりひるがえりして薄き胸板
影踏みの少年髭が生えてくる
にんげんも桜も空もちんどん屋
まんまるくなつて祈らんヒトケモノ
ゆうぜんとしぐれる鬼の面の裏
 Rond 響けばたちまちエロ立ち上がる
ひまわりの影もはげしく呼吸せり



第十七回大賞

青森県 柴崎 昭雄

54	松田京美	熊本市……28
53	岩崎雪洲	黒石市……28
52	重森恒雄	彦根市……27
51	川本 畔	松江市……27
50	本田史子	岡山市……26
49	谷沢けい子	新潟市……26
48	東川和子	伊勢市……25
47	辻村みつ子	岡山県……25
46	竹内すみこ	松江市……24
45	松田悦子	札幌市……24
44	島田小吉	東京都……23
43	あべ和香	花巻市……23
42	加藤 鯉	静岡市……22
41	佐藤幸子	札幌市……22
40	斎藤茂生	青森市……21
39	みとせりつ子	高松市……21
38	吉田三千子	名古屋……20
37	大橋政良	砂川市……20

58	加藤かずこ	札幌市……30
57	八戸むさし	青森県……30
56	榎原公子	和歌山市……29
55	田村拓郎	土佐市……29

真実の強さ	余裕の凄さ
橘高 薫風……31	
もつと実験を	吉田 健治……32
流行追随は川柳の自殺行為	
「第一七回「Z賞」選考を終わって」	
自分の宇宙を持った作品を求めよう	尾藤 三柳……33
言葉の味わい	佐藤 岳俊……34
ある選后感	岡田 俊介……35
選後評（もうひとつの私の風景）	片柳 哲郎……36
	酒谷 愛郷……37

予後の中で	細川 不凍……38
選 後 感	八坂 俊生……39
受賞の言葉	柴崎 昭雄……40
道 案 内	板東 弘子……40
選 考 結 果	
歴代選考委員	……41
大賞・風災賞受賞者一覧	……44
表 紙	岩崎 眞里子……45



第七回風炎賞

香川県 板東弘子

仙径のひと彩とあれ 落ち椿
家の形か母の背中に残るのは
分水嶺に凍えついでいる虎落笛
鶴が来る屋根かも月光に沈む
風はニヒルに五十をこぼす弱法師
何時までを影射す天き水の駅
縄電車もローカル線も哀しい村
てのひらに水を集めて水になる
錆針の先のたつきも錆色に
落ち椿のひとつが朱の火を熾す
ガラスの少女とり巻く一面菜の花は
ひまわりの黄からこぼれてゆく轍
夢の続きの憎しみとなる昼の花
木枯らしを又生む少女のピアノソロ
斜めの陽 菊焚けば風覚醒す

藁人形もえては青い炎を放つ
月光が我が芯までも射しくるを
澄んだ音で鳴るから怖い鍵を持つ
キーを鳴らせば月夜に遠い山ばかり
一体の泥人形を流せば 秋
深む秋映すか 部屋の水溜まり
水の着く先々にある涅槃絵図
塔は傾き我がうたかたのランプを吊るす
梟の羽ばたく音は父の書斎
亡父のそびらの向こうに揺れる青芒
芒ゆすって風を揺すって我が祭り
裸木に帽子を掛けたまま父は
流れゆく軀よ白い花はあるか
狂に傾き今一灯の詩を拾う
大夕陽 我が童心を返される

四日市市 樋口 仁

満月の息苦しさを知っている
傘はいる卒業式が終わっても
眉を描く鍵が錆びつかないように
首だけが汽車を待つてることがある
肝臓を通過してゆく終電車
陽が沈むフルスイングをする間に
うしろ指差されて干切れ雲になる
洗剤を変えても同じ春だろう
微熱があつて薄い夕陽を飲まされる
距離の出るボールをくれる誕生日

熟れやすい所にベン立てがひとつ
消毒をしに来ただけの無人駅
ゲームにて候恋文の行方
開花日が耳いっぱい書いてある
樹も月も夢も満ちると妻に言う
びしょ濡れの自転車を飼う冬を飼う
頭痛薬あ日常が割れてゆく
生ゴミが鏡の裏に捨ててある
拙宅へお越し下さい浮雲よ
この春は潮騒ばかり食べている

高松市 大谷 晋一郎

葬に会うあわだち草の黄の雫
そばの花咲いて自閉に似た眩暈
虫の鉦 笛らひと握りの闇で
婆の手に呼び寄せられてゆく夕日
行き交うは皆老いたりし冬鉄路
風花の荒山をおとこ舞う日なり
地平は雪に高原図鑑閃光す
月光を戻らぬ分身大の影ら
冬の蝶翔ぶはまぎれもなく人家
笑えない顔の一つが白羅漢

蠟燭の後先開こゆわらべ唄
愚者らしく祈る椿の花ほどに
神の山を降りる時確かにひとり
祠出てまだ耳熱き桃の花
春の樹の臭いが地下の木椅子から
何を語らえばよかったのか山河
花粉前線樹の下は皆黄美人
狂うほどやがて咲くたる蕎麦の花
沿線の仏と汽車へ瞬きす
少年の親指隠す栗の花

目覚しの形の父の貯金箱
ちぎり絵のような月です別れです
定年を上り框で考える
夕暮れを突きつけてくる消印だ
天を仰ぐ答ばかりが居酒屋に
過去たちがまばたきをする秋の夜
本箱のうしろが父の光源か
お茶漬を食べ終わったら狩に出る
崖つぶちに立たされている金魚鉢
夕焼けを贈って席を確保する

人家現れ毒々しきは花ざくろ
青海原に返し忘れたピワの種
ぶら下がる男は鋳物夏木立
月下美人猫の尻らぬ夜となりぬ
忙手繰ればたぐれば見える盆の家
迎え火に茄子が動いただけのこと
母を囲んで盆兄弟の汗臭し
島の土葬に婆にひかれてゆく残暑
婆が手を振るずっと手をふる鞠ほどに
月の子らが立ちのぼりたる曼珠沙華

姫路市情野千里

葱抜いた穴が連なり母がいらない
初盆がおとことおなじ肌ざわり
夕チュラ咲くバスタオル掘るのと同
桜闇 竹輪のように立っている
バセリ刻んでいる不器用な死体
牛乳がゴトン母がゴトンと落ちてくる
百巻の書を巻きもどす更年期
誰も遊んでくれない雨のさらし首
五十歳になったらおでこをひとつ打つ
鎖骨がきれいですねと五月の蚊

主婦という人妻という大首絵
乳母として招ばれる青いげ公の城
入国ゲートを出る谷崎の丑
赤ちゃんを抱いて男が散っていく
失せ物の一つは緑のホッチキス
母の名を猫は忘れてしまっただろう
タオル絞ればサンフランシスコの霧
悪人を愛しつづける縞子の黒
下駄で降りた島から逃げる足袋はだし
ケチャップの大瓶つかむ方が妻

空に半月 ワインの樽の胴ぶるい
横にいるしあわせ愛は横なぐり
蝶たちの放尿 森林火災の島へ
どぶろくを碗で掬って九年酔う
猫捨てに母と来た山 母を焼く
髪が汚れている象の国のアリス
栓抜きとナイフで創る歌劇団
男役になれない自転車のサドル
ヌーディストの島から飛んで来た鵜
母帰る グラジオラスの迷路から

雪に抱かれて

君は麦わたしは大豆 今朝の霜
切っ先は雪むらさきに黄昏れる
獣にて候、健やかに病む雪原
赤裸々を止めようとして降る闇に
かぞえ唄 花咲く時も散る時も
透明な鉛筆で描く雪の音
咲きながら泣きたく候生きたく候
抱きしめていよいよ清し冬の双腕
むらさきに揺らぎ付つ母 綴り雪
雪一円ころはここに修羅未満

にび深き空に貼りたし花切手
赤は緑を闇はころを光らせる
翔ぶ予感 雪満開の乱反射
佛百体 母の雪には及ぶまい
半分は祈り色した雪夫婦
魂は素手で素足で霜焼けで
咲くならば空と定めて二輪草
大の字で寝る 小の字で起き上がる
草を摘む子の手母の手宙の鈴
この子らに父母ありて雪光る

結び目は天と地と今 つがい蟬
冬ざれの枕一面 勿忘草
反論の背丈は夏の葎ほど
一腕をふたりで分ける黄金比
病む川の向う岸から花便り
咲ききつた冬の底から蟬時雨
祈りより遥かなものを未だ知らず
母として母を育てる億光年
西行を、芭蕉を、花のほうき星
こくらきを静かに抜けた朝なすび

黒石市岩崎眞里子

西宮市白藤海

カーテン一枚聴こえぬことになっている
わたくしが入院すると晴れつつく
主治医いうよどみなくいう副作用
感染しやすく他人が雑菌に見える
副作用いっぱい聴いてのむ薬
ベッドの上で日に育っていく覚悟
お薬が効きますようにわたくしに
あかつきの始発電車の音愛す
レモンしあればレモンの香り病室に
健康なテニスボールの音がする

自転車の影も走っている真昼
満月にちかづいてくる顔の線
見送りのエレベーターの閉まる音
わたくしの右も左も退院す
たすけてください 神よ 神は 神に
かえりたし力サブランカの咲く家に
どの人もスリッパ捨てて退院す
いちじくのうまさあやうさ 病い得て
空の色みている空の見本帳
月の顔 笑っていえるようになる

劇的に効いてはくれぬ薬のむ
私二負ケソウニナル蟬ノ声
のぞきこむ死ねる高さと思うなり
だって灰色の雲しか見えないよ
五階 中途半端に死ねそうなる
空深く見ていてくれる人がいる
露草の青をわたしの希望とす
逃げず狂わず百日纏う病衣
こは戦場 生きて脱出するところ
わたくしが戻るとうれしそうな家

加古川市坂東乃理子

わが膝にわが顎乗せて落着くや
厚きくちびる祖母から貰う桃の花
妖精は瓶で飼われて深ねむり
知らぬ間に濡れて乾いてゆくいのち
春だから少しぼけてもよさそうだ
踏切に棲むにぎやかな地縛霊
見ない方がいいかも犬の埋めたもの
どの道もすべて生家に続きおり
光合成もできる私は緑色
アゲハの子新幹線のかたちして

客室として使われる霊安所
真夜中にドッグフードを食べる音
なつかしい匂いが少しずつ戻る
船が今山を登ってゆくとところ
カマキリがゆれてちいさな風作る
宝物だったノートを捨てにゆく
キューピーに毛が生えました綿埃
水は火に勝つものらしき台所
花が咲くように傷口が開く
蟹の泡あれは呪文でできている

虹の国 なんて偉い名前なの
おじさんが三人誰もしゃべらない
しあわせも逃げていきそう広い窓
満員電車で遺体こっそり運ばれる
薬に寝て野菜の気持ちよく分かる
花ことは花にとつては迷惑な
本心に仲良しなのか鶴と亀
入れ墨もあって楽しい父の腕
曇天やいつも複数ある悩み
好きでしたグリム童話というホラー

仙台市 広瀬 ちえみ

行く春のからだの中の植樹祭
裏庭でたびびとになる準備体操
さくら咲く頃の沈黙物である
乗客はみんなカナカナカナと鳴く
鍵盤はごっそり海を見に行つた
夕暮れを細く刻んでチャーハンに
千代紙のびつたりとした服を着る
冬囲いの中の戦闘機でありぬ
ワレモノとワレモノの間に眠る
一本の糸になるまで笑いけり

ちよつと寄つてみたの南々東の風
めりこんだからだをひっぱつてもらう
三センチ低いところで咲いている
ラップするひと切れただけのたくあんに
リーフパイの上に不時着ころみる
蛸餅のパジャマでよかつたらどうぞ
南天を食べ終えるまでの滞在
発疹はあの実を食べたせいかしら
すーいすーいおそろしいすえむすめ
そこそこの幽霊になりそこいらに

蕎麦屋への道を一本まちがえり
ハンドバッグの中の酸っぱい水たまり
ぎざぎざの突起が昼の内側に
電球はあんなに高く切れており
塩をたつぷり振りかけ茶にしてあげる
湿原を戻る右肩下がり文字
セロファンの中にさえずり閉じこめる
いつの日か出土器として驚かす
オクターブ上には雪がまだ残る
春風が通るおでこの釘の穴

青森市 島 道代

おだやかな春をと夢のいちもんめ
降りられぬ電車に花も人形も
姐の義弟（おとうと）ふいに寒晒し
いたわりの科白ひらひら紙風船
鉢巻きを千本託す千の折鶴（つる）
護り仏居ませば風のコスモスに
老母（は）と古井戸（いど）汲めばあなたの星月夜
終曲の乞うる時間を風家族
風吹けば最後の歌も消えそうで
壊れゆくものへの折り灯をとます

桜雨 念仏札を握る手も
陽に月に何問うべきか桜寒む
春寒し心に花を咲かせても
花嵐いのちに表裏水を飲む
思い出のフーガ笑顔を追いかけて
風蝶のくれない滲む 燃え尽きて
お伽草紙のひとつが終わる露ごもり
払つても雪虫生む掌泣けない掌
手離せぬからくり人形 花の雨
萩一面散らした独楽の後や先

花鉄夢を見るのも夢の中
まだ脱げぬ修羅とながれる花菖蒲
夢にも雨芒に埋まる病母がいて
露草と幾度流す病母の悲歌
遠ざかるワルツ千草に降る霜よ
凍て芒の消えた手燭を灯すべく
望郷歌淋しい家に住みなれて
曼珠沙華枯れたところの彩りに
オルゴール雪の吐息の消えるまで
桜前線雪消えぬ掌をいとおしむ

守山市 徳永 政二

暗闇の中で結んでいるリボン
書いているうちに大きな蛇になる
袋から出して袋にしまう夜
一輪の薔薇がコップの水を吸う
おもしろいときは笑ってほしい亀
ストローの少しまがって浮いている
風があるのだとわかる一枚の写真
蜘蛛の糸 母はひとりの電気消す
飛び込んだところが池になっている
丘にしているのは少し向こうが見えるから

蝶はからんで顔のあたりを過ぎてゆく
春の虫動くみつからないように
てのひらの甘いところに乗ってみる
花びらの越えようとする低い塀
やわらかい土から顔を出している
ガラス玉と言われて笑うガラス玉
夜がいつぱいになったので蓋をする
雨の中走るだんだん雨になる
いつべんにつぶれてしまう紙の箱
朝からの水がこぼれてバスの中

こでまりはこでまりとして風に揺れ
ひと通り哀しいものを食べてみる
瓶の口吹けばかすかな音がする
波のないところで亀が死んでいる
ひとりがやつと通れるほどの彼岸花
夕焼けをひっぱっている鳥の数
窓に置く人のかたちをした壺を
花引くと小さな虫がついてくる
裏側へぬける大きな風である
過ぎてゆくひとつひとつをつなぐ水

大津市 峯 裕見子

声が生まれる一面の蕎麦の花
ボール紙の嘴付けて鳥になる
クレーンが掴みなおしている夕陽
しっかりと長さを見せて蛇通る
人間の口から洩れている光
端にいる人から順に透き通る
なかぞらで結ばれている声と声
死ぬ時のために尋ねる好きな花
はつけよい紙のお相撲さんが立つ
夕焼けを削ると君が立っている

杭打機だけがほんとのことを言う
なんべんもつまずいてゆく春のバス
傾きがあつて雫の音がする
花火見に行こうと思つている机
鳴かぬ虫は鳴く虫の声聴いている
逢うたびに好きになる君のそばかす
大根がはみ出しているお母さん
開いたり閉じたり遊ばせるいのち
傾きの中でほけきよと声がする
お化粧も済んだし風を待っている

蜘蛛の巣へ吹く風蜘蛛は留守である
踏み外すこともたいいせつ聖五月
しろうとが焼いた茶碗の中の空
春愁か天ぶらそばを食べていて
笑わない人が作つたぬいぐるみ
いろがみの色は流れて水の中
案山子の骨にしていた竹をかたづける
浮くために買うコンビニのお弁当
川を渡ろう ここもさみしいところで
風だ風だガラスの馬のたてがみへ

にくしんが通る網戸のむこうがわ
 抜けそうで抜けない指輪 海の家
 首すじにふわふわ天の声からむ
 水のある景色を選ぶおとうとも
 こわれもの届く炭酸水の午後
 ワイドショー始まる地底へ ふわり
 魔を落とすぶるるるんと身を振って
 健康な指にもバンドエイド巻く
 くちびるが帰ってきたらごはんにしよう
 神さまはいてもいなくても サ・ク・ラ

肋骨は鳥籠 鳥を一羽飼う
 笑顔には段差があるね「バター塗ってよ」
 「体操服どこ？」アンテナは東向き
 コーヒーが「歯ブラシ買つていてよ」ぬるい
 昨晚の毛布の匂い「雨降るかなあ」
 曲名を「ハンカチ出して」思い出す
 「お弁当まだ？」ゆつくりとはじける気泡
 濡れた手に「お金要るんだ」枯れ葉降る
 玄関に見慣れない靴「行つてきまあす」
 点呼する一人は鳥になったのね

名古屋市 なかはられいこ
 歳時記をばつと開けば尻にいるい
 春の野はいま編集の途上です
 幾層も雲をくぐつてきた右手
 うんと伸ばすと沼の匂いの残る首
 手袋をはめるわたしも暗殺者
 スウプ飲む濃尾平野はほろ苦し
 日曜日ナイフが膝の上にある
 曲がりたい泣きたい中央分離帯
 夕暮れの電話ボックス匂うかな
 ただいまと帰る真夏の井戸の底

豊中市 藤村沙耶

冬の指からこぼれたる遠き後朝
 天狼星きらめく去りしものたちと
 忘れたき刹那を覗く沈丁花
 橋姫ゆめき二月の影を編む
 くちびるに風花ありて震える過去
 遥かなる日々いとおしむ手風琴
 黒水晶に魅入られてから女の眸
 臘夜に佇つ道行きのかたちして
 鮮やかに滅びるヴァイオリンソナタ
 身のうちの夜叉引き寄せて眠る春

白鳥が翔ぶ 青春を置き去りに
 湖を茜に染めてゆく魔笛
 童話終わって胸の高みに散る桜
 やわらかき薔薇の芽があり宥される
 桜桃忌ふたりに雨が匂い出す
 葉月彷徨う沈み込みたき絵を抱いて
 炎天に消える我が身も風の寺も
 水族館の魚とうつろう淋しい目
 有明の月さやさと 螢になる
 遠景に斜塔とどめて別れる夏

ヒマラヤ杉の先から九月広がりぬ
 水楼で待つつかしき足音を
 秋のノートにひっそりと棲む匂
 一枚の枯葉 時間のない国へ
 今世の花を摘み尽くしても漂う手
 氷点で葬る美しき記憶
 初恋に雪を降らせて老いゆく天
 ボヘミアングラスに注ぐ蒼き聖夜を
 赤い実を灯して十二月に生まれ
 殉情詩集燃やせば落ちてくる真冬

和歌山市 木本朱夏

秋風に唆されて遺書を書く
 黄落の始まつている前頭葉
 生きている唇の淋しさなど言わず
 風船を手放してから失語症
 ぶらんこの戻ってこない夢の中
 脱皮して桃の匂いのするからだ
 くと身をたたみ木槿の死に支度
 前身を問われ舞うしかない揚羽
 崖つぶちのさくらにふつと誘われる
 飾らない指のさきから結水期

陽炎のカーテン抜けて精霊は
 前の世の扉がひらく螢の夜
 いつか見た夢のつづきの水の声
 暁闇に眼凝らせばイエスの目
 夜の木霊耳押さえても押さえても
 つぎつぎに蜻蛉生まれる水の闇
 身の内の川に隠した主を打つ石
 脳死論の卓上に置くさくらんぼ
 吹雪く夜は闇が添い寝をしてくれる
 半身は冥界にあり枯蠅嬢

旅をして水の匂いを連れ帰る
 春愁のたとえばぬるき猫の舌
 春節の淋しき宵のものの影
 水色のリボンで括りたい臍
 静脈が泡立つさくら散るまでは
 舞い終えた影がちいさく眠るなり
 家系図の隅を温めている明かり
 菊を焚く死者と生者が出会う刻
 祭壇は満員散歩していよう
 生きながら死んでいるのか段ボール

北海道 渡辺裕子

こうばいはゆるやか化粧水ののこり
 日に三度掌の湿り気をたしかめる
 論されているのだからかストローの折り目
 魚ひらくはずしたことのない指輪
 指五本ゆびごほんときどき止まる洗濯機
 流水南下膝のあたりのちいさな傾斜
 二百回たたくパン種流水初日
 他人ばかりの街で箸袋をむすぶ
 ときどきは過ぎた走りになるバセリ
 五十本のすすきをいっぺんに抜く

地平線すこし足りない肺活量
 大雪警報だんだん熱くなる睫毛
 片袖を通したままで川を追う
 ひとの名が乾きはじめる舞台裏
 小さな傷のままだいたい休火山のふもと
 とぎ水が澄むまで夕焼けをながす
 独り占めしてはいないか爪でむく新ジャガ
 飯縫いのまま満月になってゆく
 わたしから挑んだブランコかも知れぬ
 すこし狂って三個ひとつつみのなすの艶

花びらにうつかり触れて血がにじむ
 風船をつきあつている領きあつている
 行間に寄せるりゅうひよう去るりゅうひよう
 姿なきものにむかつて皿を割る
 流水ひかつてわたしの声がうらがえる
 いちまいの絵の中白く暮れてゆく
 何を急いでいっばんの木の道
 トドワラ透明に泣きたくなる夕日
 転がっているのは恍惚の果ての骨
 どんでんがえしはなかったトドワラ残照

新潟市 宮川 蓮子

干し大根愛しきものの数ありて
凍天を揺するコキンとみ仏ら
たそがれの窓を震わす笛吹きケトル
耳裏をそよぐ能動的な文
G線のアリヤ エメラルドの恋
キャンバスに向かう狂気の第一歩
むかし踊り子 沼沼と信濃川
風はクリスタル初夏のエロスをちりばめて
レモンの匂いして無形なるもの
影絵の中で魚になって波になつて

光源氏を赦してしまふ罌粟の花
ファックスで届く男の長い舌
パロディが好きな隣の象の耳
もぎたてのトマトしたたる十七歳
トルソーが薫る五月はガラス玉
あばら一本多い男とバルサミコ
古文書の紙魚とくたくた這い廻る
彼岸此岸はたるに託すものがある
観音の指反り妖しの火は噴くか
利休鼠の雨降り自愛極まりぬ

風吹けば風の化身となるおんな
相對死にふあーつと鮭のエクスタシー
胸底のかまきり一匹いえ二匹
脳死宣言すわ燦燦と大義名分
狂れに狂れ宵からダリと和姦する
カーンと秋天 人間を焼く臭い
リルケに拿捕されてすすきの波の上
蹀躞のはざままでベンが蛇行する
知らぬ間に月日流れて哀という
もの書きヘチャコールグレイの雪が降る

京都市 山 本 礫

影法師は 奈良へ残して帰ります
着地失敗くり返し 生きている
声かけないで下さい 当分放浪いたします
粉ぐすりを 水なしで呑むおんな
この女の体重がある手紙
蜃気楼のような女に誘われる
焦げくさい匂いはもっておりません
のぼれそうにない階段が本にある
体内時計を盗まれそうな 女だった
うしろから倅せなんか来はしない

影踏みのいつ迄つづく ひとり言
斬り結んではならぬ 返事を書いて
自己陶醉の好きなおんなをもて余す
もうそろそろ迎え討つ日が来たようだ
どきつと聞 誕生日が近い
すぐに語る 苦勞重ねて来たんだね
働くのはもう止めました ベレー帽
主婦の座を捨てる覚悟はあるのかい
火吹竹があれば ゲリラになれそうだ
敬愛していると言う 敬などはいりません

妻の子だと思いつづけることにする
ローカル線に乗ろう 少年に帰ろう
とびそうな真似だけ 鴉のふてぶてし
ワインを買って帰ろう 平和を装って
フランスの話 一平、かの子の話
火口からヒョイと出てくる 女たち
舌の先から 炎を出して見ませんか
サイレントの妻と 寒い日がつづく
不法所持してた 夫を解き放つ
袖たたみ 旅の浴衣の軽い罪

小樽市 斎藤 はる香

吹雪く夜の多喜二に逢わんみそおでん
矢が憎み合っている土鍋の中で
かくれんぼしながら老いる石の倉
森羅万象朝の鉛筆立ちあがる
逢えばまた深い目をする雪菩薩
やんごとなき母の願いの死化粧
母はどこまで技芸天女の絵を買いに
緞帳がおりて来世も母で欲しい
天上の亡父の声してきさらぎや
春の念仏こころの鈴はもう鳴らぬ

脳内革命もなかの餡が足りないね
あめで済む結婚記念日が寒い
天衣無縫風の向きなどこだわらぬ
それぞれに挽歌抱いて水の橋
逢わず逢えずつるべ落しの深海魚
耳うらの海に浮いてる相聞歌
万象は白し風と渡って踏絵ふむ
揺さぶつて愛の重さを値踏みする
冬ばらのつばみのままに女人館
花時計針の記憶に火を点ける

人生の午後とヤリラ冷えのカルテ
追慕ゆらゆら父に通じる樹を探す
かえらざる母のしずくの歎異抄
文学碑めぐって眩しい日が終る
また逢いましょうねしし座流星群
尽くすこと好きなカンナが炎えている
歯が痛むパン屋の通る日の正午
枯葉いちまい散るをためらう冬銀河
最後はひとり雪の梅の弟よ
眠剤に吞まれて明日を模索する

『 飲食 』

八千代市 西 秋 忠兵衛

歯をみがくためにひとつの影つくる
新聞を退けてすわれ飯である
座ぶとんを敷く六畳の雑木山
目刺し焼く いま神様が通つたぞ
めしを食う私のなかの私たち
糞ころがしはとくに哲学を捨てた
コーヒーのスプーンにうつる秋全部
屑籠を無人電車が通過する
どの家も海へ行進下水道
ビタミン売れて山手線はひっきりなし

選挙おわる私はとても海苔茶漬
精神の西のはずれでハゼを釣る
やきいもに手を出す胃ぶくろの少年
マクドナルドの列から秋になる祖国
おごそかに御飯をこぼす天皇制
ヒロシマ忌と地続きにあるラーメン屋
10円の玉子を生んでいる薄目
マウンドにみんな集まり歯の話
かき氷の第二芸術論をきく
鳥の影いま空き缶を横切った

電車の音うるさいけれど茄子育つ
ネス・コーヒーだけどシャガールの話
豆腐ゆれるさつきテポドンが通った
さむい日だザルの豆腐の正方形
山東菜チリ紙交換車が行った
小説のめし屋でめしが炊けるころ
ターナーの汽車が聞こえる洋食屋
ダムという酒場があったので入る
西口のいつもの店で鳥になる
アパートのひと間の壇のなかの蠅

札幌市 伊藤 紀子

ふるふると草食獣が目を覚ます
花守りに小さな闇をのぞかれて
研ぎ師きて路地裏の風酸性に
飯の世の魚や菜葉のもちおもり
一束のバラの余熱で鳥になる
臓器工場エンドウ豆が発芽する
紙の舟ゆらりとこいで昼の月
藤の下あれはいつかの人攫い
猫道の風しらしらと交差する
ビル裂けて鏡の沼は鎮まりぬ

肉色の風なめらかな羊狩り
生家へと実生の舟をこいでゆく
月光やさややと睡る石の繭
石の環を抜けやわらかい誕生
ブロンズ林立蝶きてもどる生身
海市から伝言を待つ一角獣
黄金の麦はらからを遠ざける
水羊かん絆ほんのりうとましい
種草をこぼさぬように母の存念
ガラスのリング多重のイヴのざらつく視野

稜線が柔らかくなり藁の男は
酸漿の朱を灯して縁切り祈願
トマト煮つめる魔女の屋下り
体温の青深まりて豆を刈る
月食を見に行かんとす水の駅
おとうともトンボも他人にはなれず
ややこしい秋の深みのゆで玉子
銀行が閉じてひらいて冬タンポポ
北風に軽々乗って種産みに
瀬の祭りやをとこひとり解き放つ

名古屋市 神谷 三八朗

米研ぐ妻の背へ声かけて 寝る
タバコ屋が起きていて腹が減った
お地蔵さんよ山でさえ笑うんだよ
痛い痛いといえる程のいい痛さ
裏返えすと表は日本銀行券
君の柩に南無と記すは朱の墨か
厚手の鏡にしたが 歳は歳だ
生きてやる生かされてやる おまじま
忘れたことが落ちていた 桜並木
ごめんなさいと理不尽な 月光

逆恨みとも申す 夜汽車の刺客
鉄瓶の湯気 母の冬物語
転んで起きて 相田みつをかも知れぬ
かんがえるから わからないのだ
ふつと出る念仏 そんないいお歳
どれがピエロだみん 白足袋履いている
その後時折私宛に書く手紙
母の言葉が焚火で赤く浮いている
音の倒れたのは茶碗の割れた 直後
雲が動かぬ そんな筈は無いこの風

酒屋も花屋も在って 独り身の私
雲は切れ切れ これは明日のお米
白い鶏頭見に行く 敬老バス
妻を安堵させる 肋骨の数
湿った花火に父を瞥えて ごめんね
正眼に構えて隙のない 日めくり
余生よろしく無用に候 哲学
嫁のくれた糸瓜の苗が こんなに
河原の石のまるさとも ややこのこぶし
舐めた鉛筆が発奮した 求愛

高知県 山本 三香子

初花のふくらみ神書に逢いたくて
伝説はひそやかに少年眠るとき
白木蓮きみの真闇に溶けるまで
てのひらに降るといえばの真実
新月や青の胞子はいずこより
それからの遠景 瞳閉じるたび
蒼々と螢火にんげんの瞳を選ぶ
夜を駆けて掌の群青極まれり
血脈は透きとおるようにわが柩
輪廻転生 大地の扉開くとき

呼吸始まる父は奈落の点より
序章から逃れられない脆さゆえ
吐息する飽くなき父の風紋へ
一夜ごと祈りをかわす掌の葬
無垢になる飢えた扉のまんなかで
望郷の小箱を失う やがて雨
菜の花に父の真実を覗き込む
湖に煌くふたつめの殺意
野に遊ぶかけろう父母兄として
驟雨ふたたび神となる瞬間

彼岸まで危うき者の石榴咲く
沸きあがる予感 月下のささやきに
微熱あり真水の蒼が消えてゆく
薔薇一輪 野火に抱かれていたような
眼差しはあまやかに存在奪いあう
やわらかき侵食 雨季は小指より
墮ちてゆくマリオネットのかたちして
胸底に刻印ひとつ 月の蒼
密約や異国の雨を数えていたり
響かせてセレナーデ 海からの風抱く

秋田市 鷺谷 美津子

コックピット私の全て知っている
手の形だけは好きですまだ 今も
寝たらしむずしり重くなる背中
咳の子をさすればなんと小さな背
風邪の子を風邪の菌ごと抱き締める
ほんのりと悔いに似た味ふきのとう
切手貼るまで三日ポストまで四日
初恋は逆光写真だけ残し
賢治館風のおいが見えてくる
一歳児腕からあふれ乳を吸う

おっぱいと母さんどっちが好きですか
「わんわん」と「ぶうぶ」で万物を語る
子がしゃがむ場所でしゃがんでみる散歩
振り出しには戻れぬ子育ての迷路
花びらを受けるかたちで乳を抱く
酔った耳甘い嘘など欲しくなる
誘惑は布団の温さ柔かさ
コンタクト外して恋の視野になる
サドンデス男のずるさなど承知
手も足も指の先まで二日酔い

人を恋う夢から覚める一瞬に
友達と呼ばれる恋人のミイラ
出る杭で打たれてそれからが大事
遅刻だと決まっただけの気のゆるり
私の中の燃えないゴミと燃えるゴミ
優勝旗一期一会を繰り返す
月曜日少しベルトをきつく締め
きび団子くれる上司について行く
はちきれんばかりの生命子の裸体
私の胸迫い焚きを繰り返す

夕張市 小杉美恵

風一会いま凍原に男と女
ふたたびの逢瀬目のない魚となる
火に触れて哀しきものよ雪乳房
地吹雪へ女が孕む赤い馬
きさらぎや許しがたきは私が
生くるための臓物ありて神ほとけ
音信ぶつとりスポンジが乾いた
水に手を入れてさみしきものに触れ
愛茫茫雲のゆくえは問いませぬ
美しくなりたくて霧食べてます

光る魚弥生の空に解化しけり
そして春流れる水を信じよう
たましいを洗う雨ならずぶぬれに
白蝶を招いてひとり居の清し
あばら屋に月惜しみなく風惜しみなく
百花いま過ぎゆく刻の鮮明に
この世とや鴉見ている阿呆の図
ハモニカがきこえる失くしたものがあ
るほうほたる闇深ければ身を焦がす
柿をむくやはり故郷へ戻れない

血の絆夕陽は西にかたぶきて
風止みぬ紛れもあらぬ男の死
死者と吾れ隔つ一枚秋の玻璃
火で洗う汚れきつたるうつし身は
霧深し 君を抱こうか殺そうか
誰が胸に私は残る雪しぐれ
十方に冬の音して身にぬ
雪虫に雪虫触るる 死がきれい
生きめやも水無し川に石積んで
落日へ刷り上げてゆく生一卷

北海道 桐越千繪

ゆつくりと川の流れる部屋を持つ
春の街を猫の気分で歩いて
降り止んで土筆の宴たけなわに
真夜中に白木蓮の計を聞いて
胃袋の明日は晴れそう納豆菌
こんには右も左も花粉症
さなぎから蝶になろうよ聖書を繙に
爪切つて橋からの声待っている
踊りませんかみどりの風から電話来る
顔見えぬ距離の温さよ野ばら咲く

さくらんぼの体温食べて発光す
一滴ずつ濡れる唇 隣人愛
蒼天の水蜜一個でのひらに
炎暑漣ぐ淋しいまなこ見逃さず
その言葉一日ゆれる葉さくらの闇
夕陽浴び蘇生のつばさ広がりぬ
敬老の海穂やかに魚になる
人間のまつりに出会う九月二十日
一房のぶどうの誼つながられる
百を越すパンジーの精味方とも

目薬のいつてき神の灯り射す
月満ちて馬の呼吸を書き留める
シクラメンなぜか今年は歌わない
歌うは枯れ葉耳やわらかく煮えてくる
大掃除わたしを捨ててゆく手順
冬鏡友を許してゆるされる
聖愛の折鶴らんよ子を増やす
羊水にぼかんぽかーん冬みかん
冬銀河身の錆すぐ近さかな
くるくると林檎の里に舞う雪は

仙台市 鎌田京子

ものがたり始まる瞬間湯沸器
お祈りのように三回食事する
ウェッチウッドのコーヒークップの中の風
落としたのは海を包んだハンカチーフ
右側の笑顔突然歪み出す
まだ人を愛したことのない睫毛
夢からは遠いところに置く荷物
波打ち際で探し続けているボタン
水漏れる音して夕暮れの匂い
風鈴がいつも揺れてる左心室

多分しあわせだと思ふ箸の位置
嘘だとしても白桃のまろやかさ
手も足も出ない桜が咲いている
次の打順までのやわらかい時間
引き出しの海の匂いが消えている
真っ白い包帯を巻く匂の指
空っぽの箱を大事に持っている
捨ててしまった手をごみ箱から拾う
雨漏りのする傘ですがごいっしょに
おいしかった話の口を拭いておく

岡山県 福力明良

頂点の風が走っているようだ
海鳴りの向こうで眠っているピアノ
私の川が流れてやがて春
産道の真ん中へんも春だろう
志し半ばで独楽が病んでる
歯並びが整い過ぎている怖さ
散り際の一人芝居を見ているよう
男傘何と虚しい夜だろう
霧の海援軍きつと抜けて来る
一枚の舌で挑発して見よう

舞台裏の火花こっそり見てからは
この沖の包容力を見習おう
春の音掴み損ねている枕
念のため男を湯通しして遊ぶ
道草をすれば世間が面白い
背伸びするふと永遠が見たくなり
記念樹に今は幸せだと告げる
篝火も乳房も少しづつ瘦せる
予定より早めに春がつく港
どの春にしようか時刻表を繰る

桜散る前に変身しておこう
よく笑う川だと思ふ春以降
終章はきつと優しい風だろう
また少し白が汚れて行く景色
砂時計 一心不乱という言葉
雪雲が三面鏡の後ろから
楢山を登る渴いた喉仏
また元の独りぼっちになる叫び
抽斗の奥から秋の月が出る
美しい毒だと思ふ雪の白

父よ

掌に病父^{ちち}をのせて戦うレモン反乱
 だいたい病父^{ちち}はシャボン玉の中です
 この命なごり惜しむか秋に雪
 散り急ぐ雄蕊めしべをかき分けて
 解き放ち海に還さん木霊たち
 椿満開病父に咲きし春一輪
 ビルの谷間でなおも光を求めしや
 波がさらうよ心だけ残して
 さらりと聞き流せる耳を売っていませんか
 絵の具が足りぬ地平線ありて

幻影よひとり遊びのひまわりは
 妊もれぬふたつの乳房雪する
 幾人の押花並べて満月下
 願ひひとつ虹のごとく美しくあれいのち
 こぼさぬようにこぼれぬように五月の風
 しよせん他人ごとだね都会のガラス
 異郷の地指紋ぬぐって流しおり
 アルバムめくるもう雪はとけている
 融通のきかぬ心へレモンティー
 スカートの裾からこぼれている初夏

豊中市 姫乃彩愛
 親指をやさしく包んでグーを出す
 てのひらに生の文字書くにぎりしむ
 石を積むつらい石かもしれないが
 目前の火の輪くぐりて暁
 揺りかごを誰かが奪うあの日から
 冬に逝くフランス人形挙手の礼
 病父の扉あける十字架がこぼれ
 病父よ忙しい涙だね腕の点滴
 涙もろい病父^{ちち}かれるなあじさい
 病父^{ちち}よちち六十半ばのこもり唄

愛知県 渡辺和尾

朝の水 まことの水と思うなり
 朝の声 まことの声と思いたし
 朝の人 夢など忘れ果てたよう
 さんざ雨 心に降らせ地にも降らせ
 ゆびおって十七おんのいさぎよき
 魚跳ねる池などあればたずねゆく
 傘持つて出て雨に遭う うれしいよ
 きようもあすも ずっと未来も雨が降る
 丘も野も なにも語らず臆なる
 雨天曇天 町行く人のみな猫背

病葉と流れいくなり 春なれば
 鳥の声しばらく聞かず跳ねる魚
 宇宙へとわが息を吐く舊の季節
 ぼくは五十八歳 未来なんて過去なんて
 まずしさに慣れれば ころろ妙に軽いよ
 遠方に春の山見えおぼろなり
 その白さわすれぬようにと雪が降り
 枝だけの冬の木立にかくすものなし
 風に向かつて歩けば夢の一つや二つ
 こんには おはよう 雪にご挨拶

レモン絞れば友たちの名を思い出す
 まもなくという連絡があつたきり
 懐かしい名だが会いたくありません
 全貌を見ればなんでもない仕組
 川の流れを出会いのように見ていたり
 森を歩き これは木の葉の匂いなり
 捨て切れぬ夏の縮れが胸にあり
 淋しいことはなにもない 池に風
 なにごとも一気によつて おしまいに
 天の声地の声 どれも森しい

和歌山市 野々圭子

原風景にいのちの一片つむぐ音
 動かない手からあなたのアヴェマリア
 ふくろうが雪のぶらんこ漕いでいる
 ひぐらしも地蔵もひとりの縮図
 項垂れた案山子に七つの帽子
 野を駆ける風の賛美歌^{こほりうた} 花のそと
 山を眠らせちちはは紡ぐ青い外套^{まんと}
 影踏んで届かぬ祈り 天手毬
 童べ唄野に青の転調絶えまなし
 白い轍に響くわが弦の春

空暗く遙かに花は無言なり
 琥珀の海に木の葉いちまい凍らせる
 果てしなく序曲を歌う花の椅子
 賛美歌も小夜曲も遠い遠いランプ
 樹々の泪を沈めた月の神話
 木馬の背に月の橋懸かる
 いのちを継ぐ折鶴の音木魂して
 地に曳かれ星に曳かれて琥珀の海へ
 迷いきて岬の道にある扉
 岬に生まれ岬の水を汲む椿

和光市 高鶴礼子

わたくしの根つたどれば茨の根
 肉のくらがりが低く音叉がうなり出す
 あたしのピエロ半濁音で哭くばば
 きれいごとうぶ毛だんだん黒くなる
 理が敗ける山茶花の白むしり取る
 食べるためさ なんて笑って驚の眸をする
 狛犬が見ている嘘はつき通す
 コーヒー囲む 始まっている仮面劇
 問いつめてあげる鱗を剥くように
 アハハと笑って赤むけの心

おバカさんだった本気にしてごめん
 それでも嘘を信じたがっている胡桃
 在るということ つゆくさ踏んで傷つけて
 言いかけて止めるお地蔵さんは石
 犬繫ぐように運命に繋がる
 月光にこっそり雪する身体
 するすると剥かれる桃でいたかった
 からだ閉じても蛍発光してしまう
 いつかたどりつくルノアールの木陰
 猫とうに死んでしまっていた ひとり

あひるの子はあひる お話終わっても
 哀しみが気化するじゅつと音立てて
 あきらめる いえいえ冬菜畑^{ふゆなはたけ} 青
 しばらくはここに来ないで風死すまで
 メタセコイアになろう風の丘に立とう
 誰も死ななかつたように月昇る
 ふところに虚無 どんどん喰われゆく存在^{ザン}
 頭蓋にこおろぎ「なぜ」に逆襲されている
 お前だろうと残照に射抜かれる
 夕顔ひらく 不確かなもの待っている

八戸市 横澤 あや子

泣きなさい笑いなさいよ花屋の花
忘れものしない夫で別れられぬ
満月にお泊りセツト揺れている
痕跡の目立つてしまふ夕方だ
讚美歌が流れる 欲が深くなる
秋最中誰かわたしの手を離す
帰りたくないから柿とてっぺんに
ちんどん屋が来るよ さみしい靴を売る
胸の鳥鳴いては春の憎らしさ
木の芽草の芽何をつんつん言いたくて

人はみな裏声 りんごの香をさせて
断崖におんがく降らしわたしの子
手の中の深紫の汽笛たち
落葉踏むきのうはすべて可燃性
くちべにを濃くうすくして何に飽く
奥の間をのぞけば伸びる芒の丈
みつめれば母のうなじの密航船
さくら注ぐのんどの奥の灯るまで
七色の蛇と泳ぐよ 婚つづく
カタバミが弾く幸わせのようなもの

人が逝く青空が青帯するとき
黄菊白菊ちぎれば橋のうす汚れ
いいえという言葉の中の杏色
帆船は喉にあふれる夕焼ける
咲けるのは先着順かうすあかり
ウイंकをしたのは朝の唐辛子
半身は一輪挿しに深き眠り
腓返りの奥深くにも棲む母だ
古鏡みがけばひとつふたつの朱
葱下げて美しい日の点となる

相模原市 瀧 正治

官は官を遇す 紐の付いたベン
夢売りがモゾモゾ動くダンボール
法廷で知らぬを通す落ち椿
神は居るのだろうか ドーナツの中
戦艦ヤマトを鯨鯨が吐き出した
フラッシュが先に来て待つ逮捕劇
官庁の鴉が狙う 難あられ
銅鑼に贈収賄はなかつたか
呼び止められて窒息死する回遊魚
千手観音どの手がマスコミに乗るか

免罪符流布する神の避難場所
休日の軍手精神論で棚を吊る
網棚に置き去る個性なき電車
花図鑑蝶が食えない私語を吐く
情報公開やがて柘榴が吐血する
腹の底割ると飛び出す稲光
啓かれた女が機械音で哭く
瓦礫から亡父の秘蔵の弥陀の首
妻のかたちがトレース出来ぬ落し蓋
光の国で光の缶詰を食べる

テレビ画像の真下に沈む骨粗鬆
額縁に合わせて描く目鼻立ち
魚が木に登る頃には木が枯れる
カボチャが熟れる性転換の午後
コンビ二の棚から僕を盗み出す
白兵戦の予感でトーストが焦げる
燃え尽きる工夫ができぬマツチ箱
逆立ちのビルが足まで地に刺さる
平成の森で割られる哺乳瓶
てのひらの石やがて微熱が去って石

東京都 山本 忠次郎

月の皿にいろはが置いたが置いてある
キラキラと井戸に吊る裸の少年
無毛の羊が夢から抜け出る
道化が走り出すと苦り切る影
野心などなくなった太りすぎの木
人ひとり溶けてくもらぬ水鏡
肥えた女ばかりを夢にご招待
蠅がすうと食道抜ける似非学者
陪審員 鳥と鳩の白い糞
赤と黒をうすめるやすらぎのひとつとき

顔から入って顔だけ残す鏡
誤作動のナイフ時間を刻んでいる
木のぬくもり男と女の過失率
逃水に春を重ねるキャミソール
気長に待つ背中が綺麗に暗れるまで
相槌をうつなよ石が眼を閉じる
みんな亡くなりましたと盟の水
背に跨った死神と糞を踏む
透明な道曲り角だと思ふ
花を読む裁かれることひとつあり

姫路市 榊原 れい子

満開の花闇ぬけてふりきる恋
夜ふけには笛吹きもどる母として
たぎり落つ水より今はせせらぎを
三角州君の形見のようにあり
こんな日は鍋を磨いて窓拭いて
揺れたいねメリーゴーランドのように
水片栗をとろりとまわす人の群れ
木になりたし石になりたし黙示録
餅のように心丸めて眠りたい
好きおうた頃は古代の風の中

少年を呼び出す夜の鈴しきり
揺れ動く学校にあるすべり台
母は子を守るゴジラになつていく
ひとりと一緒にきおろし夕餉食べている
黄の花を集めて葬送の朝よ
涼風に母の背中を思い出す
呼吸根私の胸にによきによきと
強き意志持つかのように握る棒
満月の力をもろう枯ススキ
壺の中のぞく耳鳴り聴くように

会うというただそれだけに理由づけ
嘘一つところがす峰を越えてきて
階段を毎朝拭いて囚われる
湿り気を愛して人を遠ざける
水底を歩くと抜けるウツの底
鉾先を急に変えたくなる秋だ
雑木林が消えたところから生きがたし
子を連れて天敵のがれただ歩く
赤ちゃんも見てますだから正直に
ゆつたりと春の彼岸を歩む猫

砂川市 大橋 政良

雑踏の中に沈んでゆく帽子
破門したどんぐりだけが芽を出した
ブライドという贅肉が取れません
曲線が美しすぎて嘘をつく
安楽死こんな形の独楽がいい
足元が見えてそこから動けない
死ぬまでを賞味期限と書いておく
失楽園迷う二匹のかたつむり
丸々と太った嘘が落ちていた
どこから来てどこへ旅する風だろう

帽子から流れ出てくる夕やけ小やけ
右脳から左脳へ流れ星を見た
カンバスにこの鉛筆と風になる
リストラの街に影法師のミイラ
つまずいたところに石の花が咲く
縄切れの形で一日が長い
螢火が鬼火か八月の鏡
コップ酒背中の寒い人でした
まな板に自分の音を持っている
人生点描エリートという接木

ハンカチで包めるほどの絵をもらう
欲望をどこまで伸す豆のつる
うしろ指痛いところを知っている
テレビ塔鳥獣戯画の中にある
この人の荷物櫃で終わらない
この傷の深いところに嘘がある
火の匂鉛筆折れるまで握る
海の絵の裏もやっぱり海だろう
一枚の紙の隙間を衝いてくる
つくねんと貝殻置いたように古い

名古屋市 吉 田 三千子

傾いた月を最初に見たのだろう
安全ピンでひとまず止める裾の端
さくら夜桜 視線の前の老夫婦
糸端が残つてしまう余生かな
大声で呼び合うための防波堤
抱擁や 洋服たちはぶら下がり
尾鰭の形見せながら春の魚
なんにちも俯いて寝る砂嵐
霧の向こうに塔があり春は辛辣
陽光は花壇の真上あらゆる無念

真冬日の癪癪玉を押し出そう
いつまでも黙つた雪が胸にある
東京の雪を窓辺で見えています
公園の椅子に座つて食べるパン
桜木に吊す誓約黙約なども
桐はいま枯れてさわさわ実を零す
花は赤色 花は白色 静かな壺
展覧会出て人込みに紛れよう
あいつの鼻の位置など思う夜行列車
夢は煙に巻かれておしまいですか

どこまでも線路が光る町にいる
痛い音して夜の電車が橋を行く
これが暮らして茹でる卵の一個分
また春に大きな鞆開きましよう
菓食べよう 肋の雨が踊るから
人ひとり石に飾られ終わりです
やすらぎは野原がいつも光ること
木漏れ日をこよなく愛す こわれ者
なんにちも午後からの雨夕チアオイ
悪人の背丈を越える夏の草

高松市 みとせ りつ子

あとひと日あといちにちの桜花と暮れる
青葉ゆらぐ姉も微かにゆらいでいる
姉の四肢過失の木々の伸びてゆく
鴉の死わが死を回る独楽ひたすら
一族がばらばらに哭く春灯下
細いほそい指で描いたのです夢は
渡り鳥姉の喉より翔びたてり
春の死者髪梳く姉の真似をして
灯明が消ゆ遠雷に交じる姉
永遠に永遠にその夜の姉は水散華

姉の黒髪書きそこねたる詩編が光る
水浄土行きつく果ての火の祭り
古代舟沖へ沖へと姉連れ
山門登る春の時間を亡姉の手に
半島の虚空菩薩は潮の香もどす
妖しき風は半島までの葉鶏頭
踏み入れば猫に囲まる人江の町は
茫洋と北へさざなむ魚詩人
荒砂が手からこぼれる罪隠し
幽かに戻る亡姉の足音萩の花

山河に人在り惻惻と恋ゆけり
吾亦紅逢いたい父よ父の子よ
出没するピエロと野を駆け野に唄い
ピエロピエロよおん身産みしは芒雨
銃放つピエロに円形劇場を
廃村のコスモス縄文式呪文
わが窓を打ちに来る風含み喰う
降りかかる落葉よ鈍痛が疾る
父寒から姉寒からう時雨
いちにちは終る未枯れた叫びして

青森市 斎 藤 茂生

のりしろをたつぷりとつた夢芝居
たえだえになつてはばたくあおいとり
大根のような鮎色母を煮る
あつたかなピエロの顔になる涙
父の靴ぶかぶか夢が鳴っている
カレー皿秋の裸体を盛りあげる
誘蛾灯 蒼い小指を切り落とす
スーパリーの袋の中に父が居る
ホチキスで男の影をとめている
鈍行の背凭れにある地球

空洞の土偶の子宮 宇宙がある
ふるさとに影の集まる駅がある
歯ブラシからアングラ劇が始まりぬ
珈琲のふんわり冷める音を聞く
からっぽになつてしまつたすなどけい
原色の言葉で月を拾い切る
欲しかった障子の裏の指ぎつね
新聞をぐつぐつ煮込む闇の音
蛇口からおんおん落ちる童話たち
板状土偶 おんなの臓腑あらわなり

疑問符でまがつたままの小指たち
白湯を飲む僕を封印するために
ひとさじの父をいれてるミルクティー
居酒屋に落とした影をまた拾う
名刺刷る瘦せた男の貌をする
アリスが落ちるわが胸のポケット
友逝けり同じ厚さでハムを切る
鳥籠の闇の深さを鳥に聞く
手品師の鳩を生みだす掌のぬくみ
山彦のポケットにある花の種

札幌市 佐藤 幸子

こめかみに漂泊中の雨・霰
寒月光身に飾るもの何もなし
我儘がすんなり通る焚火あと
大きな葛籠小さなつづらみんな邪魔
ふつくと膨らむパンとサファイヤ婚
平静を装う影を濃くして
かけ替えない一時よふろふき大根
残り時間を教えて欲しい真行草
たんぼの海にて魚になるもよし
献体も散骨もなし柿の種

水面が揺れている誰かが呼んでいる
くちびるを噛むと甘酸っぱい山河
湯舟いっぱいに並べる照る日曇る日
にこりともしない植木に水をやり
さくら葉ざくら親族会議は終わったよ
競り勝った膝ゆらゆらと地動説
ありふれた小咄沼を出たがらず
落ちそうで落ちぬ釧の深い霧
十進法追ってはならぬものもある
人品をやつと保っている土鍋

降る雪の白さ疑い深くなる
退くか進むか獣の眼となりて
牡丹雪今さら何を晒そうぞ
住み慣れた時計の中のギブアップ
大波小波いずれの綾を手なずけん
誰も彼も一つは持っている梢
行間にときどき詰まる鶴の目鷹の目
妖怪と遊ぶ手筈を整える
積み過ぎた自信ぐらりと氷点下
賞罰はなかった和食器洋食器

静岡市 加藤 鯉

君がいてくれるジャスミン茶のように
愛満ちる月の引力かも知れぬ
やわらかき言葉で深く釘を刺す
恋しくて三半規管停止する
テレサテン時の流れは無情だね
諦められずに深爪してしまふ
勝ったのは女するりと抜く指輪
葱坊主恋愛ごっこ終わったよ
水が湯に変わる瞬間妥協する
星まつりカンパネルラの声を聞く

樹齢千年ヒトの愚かを知り尽くす
道化師のレインコートが乾かない
ブラックで女の嘘を飲み干しぬ
ステップを昇る罵声を浴びながら
一枚のA4で飛ぶ僕の首
沸点に達した夜の無言劇
急がねば毒虫が羽化してしまふ
フェロモンがくすぐる僕の休火山
罪状認否女の素顔見してしまう
にこやかに握手ダミーを演じ切る

天守閣から雑兵が見えますか
箸にも棒にも引つ掛からずに生き延びる
戦火へと飛び込んだきたチンドン屋
家裁前に赤い糸屑落ちていた
万歳三唱味方ばかりと思ひ込み
走らない木馬がたむろする酒場
絶やさない笑顔で外堀を埋める
靴下を脱いで孤独だと思ふ
日曜日犬をシャンブーしています
その時はその時今は歌おうよ

花巻市 あべ 和香

ひまわりの明るさウフフと言ってしまう
やさしさに発芽してゆく春の四肢
編み棒が動いているのは愛だろう
忘れていたのは卵だったこと
半熟のままタイムリミットがせまる
千本鳥居くぐる 思想を変えながら
あやとりの続きをせんと花遍路
うるうると尻尾が何か言いたそう
寒晒し今より白くならんとす
いのちまだ人恋う温み秋海棠

幻の花に逢いたしベルを押す
風船がずらあの子この子の行方など
里訛りまあるくまるく受胎する
ふるさとの源流支流雪が哭く
ぼたん刷毛死とはこんなに近きもの
わたしの血すこし分けよう秋の蚊よ
女系の血強くはかないひなあられ
はなびらのひとつひとつに仏の座
水蜜桃おんなに生まれし幸不幸
大根をざくり 心を覗かれる

この村を去るのか鳥が去るように
龍胆のむらさき冴えて黙示録
ひとりつきりになると広すぎる小箱
連れ舞いの不揃いしばし許されよ
ひとさまへ言えぬこたわり葎の花
流れ流れて棘は再び鳩尾へ
開き鱗雪の冷たさ風の冷たさ
辛夷はらり微かに雪の匂いする
おおばこのように生きたいねじり花
この続き明日にしましょうお月さま

東京都 島田 小吉

ペンだこの指が半生語り出す
運としか言えないような歳を生き
リストラへ手負いの虎の呻き声
伸びていく平均寿命遠く見る
一筋の道と信じて霧の中
揺れながら街の日本語どこへ行く
幸せの向こう側から来る計報
友の茶毘なびく煙へ立ち話
本の街ペーパーレスの隙間風
自分史へ原稿用紙照れている

直感を信じて歩く薄氷
火の玉が昇る自然という奇跡
鉛筆の芯の硬さに負ける文
紛れ込む他人の中の安堵感
立ち向かう蟻螂に見るわが姿
枯れてなお諸諦精神失わず
ゆつくりと流れる時に背く日々
したたかで時にしなやか竹の性
シャボン玉はかない命輝かす
知恵の輪が抜けて戻らぬ逆思考

鬱の世へ喉切りたいことばかり
胸底に激む昭和の明と暗
待合室老人群れて物言わず
大輪の花は語らぬ涙壺
誕生日祝えば過ぎる父母のこと
父の歳超えて生きる日中ジョッキ
たじろがず独楽は無言で回るだけ
夏風邪がなかなか抜けぬ遠花火
逝く夏へ戦後史を読む蟬時雨
老眼鏡拭いて坊っちゃん読み直す

札幌市 松田悦子

狂いゆく静けさ藍の深さほど
家族つて何たる一膳きりの箸
塩胡椒夢の減り出す曲り角
哀しさをゆつくり潰す冬苺
老母は児に還る水甕の水位
掬う水洩れてゆく水憂愁平野
てのひらが粘る満月かごめの輪
がんじがらめの縄一本に縛られて
その先を自由素通りして 雪に
鳥になる鳥の未来に濡れながら

三月の水音微か 耳洗う
私を洗うと涙だけ残る
約束は反古に通過駅の風
疵痕に灯す花般愚の明り
惜春のページ義足の影をおく
三角州あれは残夢か正夢か
余命表金魚の糞のごとくあり
噴水が零れる行き交う人も零れて
夏の現に大きな月が湧いている
オルゴール過去が去りゆく乙女の折り

黄昏のいろが足りない絵の具皿
渡り終えたはずの水河期いまでも水河期
解凍の始まる秋刀魚の眼が虚ろ
不確かに確かに老いる昼の月
老いて候 硬貨一枚裏返す
美しい淋しさ柿に色増して
泣いて笑って転んで立って 人間
死ぬ力蓄えておく死亡欄
煮転がし煮詰まる終点近くなり
終点はてのひら 最果て本線に

松江市 竹内すみこ

もの言わぬ象の瞳を忘れない
真向かえば私の方を向く桜
門のない家にも春がやってくる
ありふれた朝だ電話が鳴っている
犬の皿いつもキラキラ光っている
桜など待たず逢いたい人に逢う
どうせ忘れる傘を大事に持っている
湖にいつも見られて住んでいる
夕焼けの真ん中を行くバスに乗る
私の中でブランコ揺らしている

紫の花が健気な雨の朝
鈍行で友見舞う日の雨もよい
背の高い男に会うと振り返る
思いがけぬ高さに咲いた百日紅
蟻ん子が机の上を歩いている
家具一つ減らして風がよく通る
塩水の中でぼんやりする胡瓜
振り向けば私だけを見るポスト
あたたかいものに切手が貼ってある
電話では夕日の色は送れない

忘れられないように咲く月見草
ともだちに電話をすれば話し中
指切りを百回位忘れていた
満員のトイレの前で待っている
傷口にまた呼ばれている彼岸花
ゆつくりと豆を煮ているいい時間
腕伏せて今日くる人を持っている
私の中で大きくなっていくボール
冬の川考え事をして曲がる
ほどほどの傷と暮らして面白い

岡山県 辻村みつ子

心身に入園番号つけられて
海が鳴る小島の細い胸を裂き
この胸に雪降り積もり白い闇
雪よ降れ椿よ白くしろく咲け
寒いから行進曲を歌います
人形にリボンをつけるお正月
泣けもせず試練でしょうか寒椿
心臓の苦悩解かすか水仙花
愛も死も風に誘われ花になる
さくら満開優しい人は去っていく

わが雛よ流れていまはどの辺り
春の海貝も私も啜り泣く
海に向かって折っています耐えています
白桃の汁も涙もぼたぼたと
優しさが悲しみとなる置き土産
思いの丈言えはほろほろ萩が散る
告白をした冬空に枇杷の花
しなやかでロングスカート温かし
悲しみの深さに乾ききる眼
大小の音が私の意志を生む

髪洗ういま美しくあるように
ときめきも愁いも秘めた風の文
髪を梳く青葉若葉の香りする
梢の緑漲ってなぜ泣ける
孤独とは恐しきこと好きなこと
障害を強い個性と言いますか
地に転ぶ椿の花も哀れなり
花一面私を囲むこはどこ
わが瞳流れて消えるほど泣いた
人形に歌って聞かす恋の歌

伊勢市 東川和子

生きるための大きな約束小さな約束
どこを向こうか 花は散ってしまった
身のうちのふわりふわりをどうしよう
大嫌いだ好き かきまぜる生卵
レントゲンでは慎ましいワタクシに
大仏さまを好きな角度から見上げ
母と笑いながら山門を通る
傘を傾けるとやさしい雨の音
ほめられたのは水色のワンピース
義母がカーネーション連れて退院し

自販機の真上の空に雲が湧く
一時間に一本のバスで会いに行く
失せ物が出てくるって春のおみくじ
少年のほかは桜しか見えぬ
桜散って皮膚科耳鼻科に通いだす
この先はきつとバラダイス 靴磨く
美術館からのみどりにまず染まる
少年につかまったらふかみどり
ともだちとナンジャモンジャの木に凭れ
八月十五日のポストに投函する

猛暑なり 電話一本かかってこない
蟬時雨 豆腐一丁買いに行く
夏も私も自動改札を通り抜け
じゅうがつの森に着地したらしい
私に飽きてどうなる 朝が来る
じんせいとは 力を抜いて言ってみる
退屈な伴奏にじゃがいも煮崩れる
紅葉狩り 私はただの通行人
あの人も夢の残りを食べている
渾身の一行 阿呆になるばかり

新潟市 谷 沢 けい子

性揺すり衡える朝の体温計
排卵の疼きに玉子かけご飯
金鱗をこそぐ鍊の温い腹
恥ずかしい夢恥じらうは甲の染み
風立たぬ部屋で椿の自慰統く
微臭い明き巢睦言懐かしむ
飯の世で夕顔に接ぐ胡瓜苗
千手観音ネールアトで願う事
わが解体力尽きても召されても
ひたすらな母の折りへ冬木の芽

頬杖に洩れる隣家の笑い声
かつたるい男の多弁雪見舞い
我が儘も甘え上手に寒牡丹
タンポポの絮追う善鸞の親離れ
渋柿ガブリ憎いにくいと暮る思慕
俺僕私たれを逃そう笹の舟
抱き締める腕あろうと寒雀
これ以上寄れぬ男で乳匂う
口紅の硬さ落ち着く今朝の秋
女の児持たぬ男へ身売りなど

起重機に天はこまでピサの斜塔
解さない卵を抱いて遡上する
淡雪を受けんと紅を拭く間
定価のまま萎むつもり蓄薇の棘
強がりを悔いつつ落の皮を剥く
人形でおれぬ齢へ割る胡桃
原っぱを遁走しても草風
余力まだ信じて蜘蛛の巣を棄てる
人身御供になれぬ暖冬日本海
怨の字に囁かれまして冬籠り

岡山市 本 田 史子

アラジンのランプと遊ぶ春の虹
それは罫か気付かぬふりをしていよう
風が寒くて寓話の森にまぎれ込む
夢をください千本の蓄薇よりも
乱から狂へそんな推移の花たわわ
水かげろうほどの誠実不誠実
逢わぬまま秋の香水使い切る
二重括弧の深みで朽ちてゆく手紙
裏返す枕の下にいた他人
そのことに触れずひとりの傘を干す

所詮はひとり花ひとひらは地に還る
柩打つ音轟々と 秋の耳
水の駅 うからやからに寒い風
魂を失くしたあたりから驕る
いたわりの言葉とおもう雨の音
短日の今日も旅びと汽車が発つ
鴉の群れに白いカラスがいて他人
石の街貌を持たないひとの群れ
めくじらを立てて裏山からしぐれ
風は旅びといつも知らないふりをする

ひとひらの方向音痴の雲である
くちびるの微笑みさざ波がひろがって
絵は無題ころの奥を描いている
自画像へ確かな画鋏二個の位置
生き死にの山を越えれば夕餉の匂い
押えても押えても怒り 菜を刻む
ポケットが無いから拳かくせない
枯草の匂いの沁みた指洗う
大根の白さ いつまでの静謐
思いっきり咲き思い残しなく散る

松江市 川 本 畔はら

横たわる私を月に差し上げる
目薬をさして男を確かめる
一日をわたしの蓄薇に水を汲む
走り抜く恋を追いつめ壊すまで
騙される私を見よう赤いランプ
手折られるならいっそ風に攫われる
時計背に別れたくない時間帯
発車ベル女の髪が追ってくる
甘い言葉落ちてはいない冬の橋
鉛筆がちよっとひねっておく皮肉

何だかだと理屈っぽい九官鳥
人生の午後は問われること多し
折り鶴の折り方人に聞けますか
すこしずつ皺もち寄って同窓会
階段の下で聞こえる風の声
ようこそと覗いてくれたのは子猫
煩惱を鳥かごに入れ持ち歩く
秘密いっぱい落ち葉は尻い合っている
黒豆を食べ比べして遊んでいる
牛蒡一本故里が回り出す

胡瓜トマトあしたの朝に勝負する
風いだ海かきまぜ今日も罪一つ
めがね逆さに明日にすこし謎かける
気まぐれに散歩するだけ冬の月
したたかな闇したたかに女抱く
罪状の一つ時雨のポケットに
干しバナナ昭和一桁沈黙す
揉めごとは消えないいまをスリッパで
どうもどうもいい加減な男たち
置き時計すこし傾き生きている

彦根市 重 森 恒 雄

海鼠なまこ打つ誰が死んだと聞き直し
ただ看取るだけの時間の吊し柿
うまそうに水道水の垂れる音
抱き起こす度にくずれるあばら骨
窓に虫ときどき動く不整脈
身障者手帳の写真 朽ちている
痛いとも言わずに星を待っている
コンビ二で死に水を買う虫の秋
姉の手も妹の手も瘦せている
泣くこともあるまいと言ううさぎの目

失ったものは眼のみか白い魚
この世しか知らずに鐘が鳴っている
充分に種を落として枯れている
ふるりの深いところに大瀑布
きのうとは違うところへ沈む月
安らかに眠ればそれでよい葉
停止した心臓に置く聴診器
いやだとは言えぬ辺りの黒い石
ゆっくりと濁った水の行くところ
分からんとつぶやく医者毛が薄い

バラバラになった自転車から降りる
私に間違いない指の傷
決心のつかない夜のラブシーン
面白いこと考える現像機
味方ではないかと窓にへばりつく
ザバザバと水に入れば濡れる臍
サヨナラの挨拶なんかせぬ天使
暴風雨圏内にてスバゲッティ
退屈な時間に食べる桜餅
好きなのは妻と答えて夏の果

黒石市 岩崎雪洲

人間の門限さあて戻ろうか
 大気圏突入 年齢不詳の象になる
 静脈をゴトリゴトリと行く鰯
 あの人と五段活用していたら
 無器用なカルタと現在進行形
 ざぶざぶと漢を洗い直す槍
 尻っぽまであるから俺の活きづくり
 人間万才 ちよつと厚手の茶封筒
 走っても歩いてても夏の心電図
 他人からはじまる石の繰り返し

凍らない川を散骨場所にする
 仮りの世を往つたり来たりする鏡
 ノズルから旅立つ人間喜劇団
 少年のカルタをめくる雪詠り
 球根に空を貯めてるランドセル
 たんぽの根を掘るように少年期
 人生の靴のひもかも知れぬ臍
 百分の九十九までしゃぼん玉
 風の子が薫るすずらん小学校
 問の三 軽い打ち身の中にある

トンネルの出口 人間とは何だ
 宛先もやっぱり自分に書いている
 リターンキー 押すなおすなの針葉樹
 とつ面鏡 子らの翔び方悩み方
 父さんを仕立て直したのが僕で
 空一本 雪の回廊から掴む
 巣立つ子の叱つてくれてありがとう
 人間の遠心力を噛み砕く
 わたくしがわたくしでいるサスペンス
 前書きも後書きもない眠り

熊本市 松田京美

これからと思う蔵書をみな喰おう
 地方から発信しよう切手買う
 清らかに生きてゆこうねセリナズナ
 哲学に遠いピンクが着たくなる
 心中とはいいいものだろう春の闇
 限りなく桜愛して死ぬだろう
 子守歌わが生き霊を眠らせる
 狂うかもしれない磁石持っている
 大寒の辞書はバリバリ滋養だね
 公いいたいと思うひとは剣花坊

多喜二を思う彬を思う冬立つ日
 人の世はまことに寒い冬の襟
 鬼女になるまでのわたしの日本海
 ひとりいてつららになつてしまふ寒
 不器用なわたし指から血がでてる
 大寒の風邪だ病むだけ病んでやる
 なにもかもやがて電池も切れそうだ
 強がりのわたし視力がおちてきた
 生きたいと思うときどきそう思う
 泣くたびに余分なものが洗われる

鳩ボツボ歌うさびしいなと思う
 母も老いてるわたしも老いた敗戦忌
 菜の花の海にひろがるアコーディオン
 のぼつてゆこう階段がある坂がある
 うずくまるいい知恵がなにもないのだ
 はみだしながら生きた書いた原稿紙
 つくつく法師みんな言葉にしましたか
 いつかひとりであなたに会おう滑走路
 いずれまたどこかで会おうゲンゴロウ
 心配無用わたしはきつと立ちあがる

土佐市 田村拓郎

ブリズムを抜けられぬ僕の挑戦
 骨太の指で昨日をそつと積む
 祈り火が列なしていく水無川
 ビードロに吹き込む鈍色の明日
 生臭き風を呼ぶ大根の花
 降り下ろす手から零れる遠い父
 誰を呼ぶ未明の蓮が鳴っている
 抽出の秘密を乱すほうせんか
 三日月を滑り始めたガラス玉
 潮騒に誘われ青い水 唇に

盛気楼の中誕生日が揺れる
 たんぽが飛ぶ知らぬ町知らぬ人
 曖昧な理由で木蓮は落ちる
 赤き眼の獣 吐息が優しくて
 急くように月下に踊る少女哀
 掌で逝く 僕は確か河原に
 青い手紙破る 花火降る海に
 不知火に骨はサラサラ散っている
 慣れぬ猫眼球にある物語
 水葉落ちてガラスの花開く

真つ青な夜 君の花粉が飛んだ
 咽喉は星と流れた冬の明け
 陶の花心に刺したままのひと
 こめかみを斜めに落ちる原風景
 暖かき死の予感あり月を抱く
 今朝着いた白紙の便箋が重い
 秋霖を染め上げていく緋の記憶
 両手から零れる十六夜の吐息
 午前零時狂った月の喉が鳴る
 時消えて少年がいる君がいる

和歌山市 榎原公子

錯覚のようにさくらは散りました
 魂をかばう太目の眉を描く
 その奥へ愛の記憶をしまひ込む
 燃えるもの抱いて女は濃むらさき
 言い勝った女が痩せる夕間暮れ
 戸籍上他人になった深海魚
 積年の嘘染みになる皺になる
 小魚の頭哀しみ蘇える
 哀しみの音譜が染みているからだ
 脱ぐたびに私がやわになつていく

痩せ鬼一羽青菜で生きられる
 攻撃のリズムが続く未完の譜
 闘いの明け暮れ魔物住まわせて
 矛盾だらけの海でそれでも群れている
 神様との約束で引く線がある
 紫の便り北からラベンダー
 焼き鯖の頭見比べ半夏生
 虹の立つあたりにきつという詩人
 尾鰭振る金魚を追っていったきり
 私の盛夏がはじけないヤマセ

遠雷よ忘却なんてありはせぬ
 虚と実の間の朱よ曼珠沙華
 半転をして私を浄化する
 哀楽を編む人間をモチーフに
 目打ち跡無意味に刺したものはない
 流された土は沃野として生きる
 混沌の彩にビジュアル系男
 食いはぐれないよう次の世も法科
 いいところはみなにんげんに渡られる
 神の手に委ねようやく風いである

「乱」

月光の木馬はいつも一人乗り
 ハンバーグ父さんはもう飛べません
 笑い顔なんて素敵な武器だろう
 母さんの恋人なんだ父さんは
 方程式にバンソーコーが貼ってある
 寄り添った影が時々足を噛む
 みんな黙って羊の帰る場所がない
 逃亡も利き足からの第一歩
 血液に寄生しているガキゲゴ
 とりあえず古釘食って生きてます

背の傷を開けば雪の日本海
 入所拒否母に一本歯が生える
 さようなら麦藁帽が曲がってます
 悪いのは僕です独活の酢味噌和え
 火宅食卓かみそり色の氷の実
 グキグキとこの世へさらすわたしの芽
 人格の南でブレイカーが落ちる
 鋸と首と並べてあるとして
 現住所氷枕の番外地
 鼻血どくどく影の傾斜が直せない

青森県 八戸 むさし

飲んできた乳の量だけ泣くいのち
 太郎次郎この手で打った足の釘
 傘さすと濡れた孤独が立ち上がる
 膝の裏雪が眠っているんだね
 隕石の降る夜砂漠で酒盛りを
 月光の渚へ影を脱ぎに行く
 コー克斯を焚いて中也を呼んでいる
 君からの手紙が僕の滑走路
 下ノ畑二居りマス賢治もわたくしも
 渡らねばならないならば光る川

札幌市 加藤 かずこ

やわらかな耳を鶏食べたがる
 沸点のないフライパン歪な目玉焼
 すり切れた言葉はいらぬ豆もやし
 被写体の少年透ける昼の月
 プチトマト押し潰す学園広場
 フロップビーへゆっくり少年閉じこもる
 ジャックナイフを歩く 狂うたスニーカー
 少年が食べるブラックユーモアの大盛り
 パソコンの童話の森を風が斬る
 鳥獣図鑑に棲む遠い日の少年

修整液へ浸す肋いっぱん
 海は沈黙奇妙な魚を抱いてから
 眠らない羊をどこへ捨てようか
 売られゆく牛の眼玉に亡父がいる
 水を呑んだのか ベン先ひび割れる
 汚れてる影がときどき夜泣きする
 街の死角音声多重冬の蟬
 肩籠へあふれる亡父の屍か
 たそがれの本棚ゆるする風囃子
 噴火の跡がある亡父の冬帽子

ふところの暗さへ潜む海ほたる
 楽隊がときどき消える乳房から
 柘榴の実食べたふたりは逃亡者
 三枚におろして骨が見つからぬ
 サークラス去る時計の中は水びたし
 裂けそうな記憶のなかの木槿の花
 コンビニで売っている人間の嘘ほんと
 汁椀が渴いたまんま秋が来る
 生死去来まよいを問うてる冬さくら
 家族ゲーム疲れた葡萄ばらばらに

真実の強さ 余裕の凄さ

橘 高 薫 風

Z賞は今年第十七回になる。この賞の草分けの頃は入賞の作者と没の作者の力量の差が大きく目立ったが、おいおいその隔たりは縮まり、難解度の著しい作品も数は減った。
 投句者のレベルが平均して上向いているように思える。

山本 磔

影法師は奈良へ残して帰ります

平城京から平安京へ奠都になったのは日本歴史の厳然たる事実で、それがこの句にも心理の底に揺曳させているのがこの上なく興味深い。京都在住の作者の恋慕のはしくれのよ

うな落花残心の風情なのである。

タイトルに余裕の凄さと書いた所以である。

この女の体重がある手紙

のばれそうにない階段が本にある

火口からヒョイと出てくる 女たち

男には恐ろしくて近寄れない火口も女はたじろがぬ。火口から出て来たのは、炎にも負

けぬ緋の装いの卑弥呼である。そして和泉式部、十二単を着ていてもあの人ならと思うていると、日野富子が、岡本かの子から宇野千代が桜の化身のように出てくる。糸をたぐると隣のおばさんまで。女とは……である。

白藤 海

ベッドの上で日々に育っていく覚悟

健康なテニスボールの音がする

かえりたしカサブランカの咲く家に

どの人もスリッパ捨てて退院す

わたくしが戻るとうれしそうな家

死線をさまよう療養生活の経験を持つ私は、

このような句に接するとわがことのように胸

の奥から感応する。何となく明るい気配のあ

るので句の価値を高めた。真実の強さ。

樋口 仁

うしろ指差されて千切れ雲になる

目覚しの形の父の貯金箱

私自身ちぎれ雲のような暮らしぶりなので、

ああそうか、うしろ指を差されているからか
 と思ってしまう。身につまされた句。

一刻に出勤して定刻に帰宅の父は、毎日一
 句ずつ作句する貯蓄型でかなしい。一晩百句
 ほどばしるようになり創りしばらく呆けている方
 が味があるぞ。

坂東乃理子

わが膝にわが顎乗せて落着くや

アゲハの子新幹線のかたちして

とばけた句も年を寄るととてもなつかしく

感じます。世の中せかせかし過ぎです。

瀧 正治

戦艦ヤマトを鯨鯨が吐き出した

銅鐸に贈収賄はなかったか

個性派、この感覚はどんなん伸ばしサラ

リーマン川柳との差を示して頂きたい。

情野 千里

タオル絞ればサンフランシスコの霧

岩崎 雪洲

風の子が薫るすずらん小学校

松田 京美

会いたいと思うひとりば剣花坊

東川 和子

ともだちとナンジャモンジャの木に凭れ

もつと実験を

吉田健治

先ず、応募者数が減ったことを、残念に思った。そして個性豊かな作家が一人減り、二人減りして、熱気が前程感じられなかった。その代わり粒よりの作品に恵まれたことに感謝したい。応募者数の減少の一因として、川柳総合誌Xの存在も考えられる。次回からは、又、新しい熱意ある作家の登場を冀っている。

特選 柴崎 昭雄

一読してこの作者を特選に推そうと強く思った。全作品を読み了ってからもその決意は変わらない。思いと技量、共に充実している。

○芽吹かんと水をたらふく飲み込みぬ

一句目から作者の生きようとする強い意志が感じられて、境涯に負けていない(動き)を感じ取った。それは『一灯を生きつらぬかん点灯夫』にも言える。

○なきつくし青をつくして月下の影は

○血の濃さへ傾く椅子の夕焼け小焼け

○ひまわりの影もはげしく呼吸せり

とにかくこの作者の句を熟読して、その思いをしつかりと抱き止めて欲しい。それが、私の切なる思いである。

秀逸1 なかはれいこ

作品の粒の点では、むしろ斎藤はる香さん、峯裕見子さんの方が勝っているかも知れない。しかし、新鮮さという点でより高く評価した。特に注目したのは、第二連の実験であった。会話と地の文とが上手く調和した手法の斬新さに感心した。全部が完成作品とは言えないが、句として自立している。この作者の特徴は、何よりも句が若々しく現在を呼吸していることである。今後もし上手に負けることなく、新しいテーマに挑戦してほしい。

○これもの届く炭酸水の午後

○くちびるが帰ってきたらごはんにしよう

○笑顔には段差があるね「バター塗ってよ」

秀逸2 斎藤はる香

○逢えばまた深い目をする雪菩薩

○追慕ゆらゆら父に通じる樹を探す

○枯葉いちまい散るをためらう冬銀河

北国の抒情を、深い所で捉え、しつかりと作品化している。亡き父上への挽歌が核になっていると思われる。どうぞ、この(思い)をいつまでも大切にしてください。

秀逸3 峯 裕見子

作品の粒は前の二人よりも勝っていた。実験性、抒情性では劣るが、軽みがある。この作者は不器用なようでいて句のポイントの掴み方がうまい。どうか器用貧乏にならないで下さい。ウイットを大切に。

○人間の口から洩れている光

○傾きの中でほけきよと声がする

○浮くために買うコンビニのお弁当

——心に残った作品——

祈りより遙かなものを未だ知らず 眞里子

塔は傾き我がうたかたのランプを吊るす 弘子

風邪の子を風邪の菌ごと抱き締める 美津子

弥勒菩薩の腕を伝ってくる 時間 ひろむ

今日の答えにさんま一匹焼いている 敏子

流行追随は川柳の自殺行為
——第一七回「Z賞」選考を終わって——

尾藤三柳

今回も、選考にあたって、ひとつの方針を定めた。「ことばの踊り」に幻惑されない、ということである。

ことばだけでも、踊りはできる。天保期以後の狂句の鮮やかなことは踊りを見れば、それは分かる。狂句は、ポデーを持たないことばの踊りであった。そして現在、ポデーなきことば踊りの花盛りである。

川柳に、模倣と流行語は昔からつきものだ。が、ますます猖獗をきわめる口ことば——です、でした、ですか、ます、あります、ませぬ、ませぬ、ますか、ました、しましように、ください、それに独白体のだろう、いよう、みよう、おこう、行こう、あげる、それに加えては、例によつての私、わたし、ワタシ、わたくし——これぞまさしくことばの踊りであり、辟易するというより、現代川柳の語彙のまずしさにタメ息が出てくる。

流行追随は、川柳の自殺行為である。

作者個々にとつてはほんの一部であつても作品数がすこしまとまると、たちまち合唱になる。これに、類想のステレオタイプを加えると、作品原野が一挙にせばまる。

こうした中を縫って、ポデー(実体感)を持った作品を拾い出すのは、決して楽な仕事ではない。

と、冒頭から憎まれ口をきいてはみたが、参加者、参加作品の水位は、平均的な現代川柳の水準から見ても、決して低くはない。

この世界、見えるものが半分、見えないものが半分、そのあわいに作品世界がある。きれいに仕上がつてはいても、実在との葛藤がない抽象作品は、最初にカットした。

予選で二五点、その中から一四点。単独作品で、これはユニークだという作品は見当たらず、多かれ少なかれ二十世紀の殻を引きずった風景に終始しているが、平均的な世界

のおもしろさで上位を決定した。

その価値判断に自信があるかと訊かれればあるとは答えられない。この種の営為に自信が持てる人は、エライとは思ふが、そうなりたとは思わない。単純な裁断批評がまかり通らない位置にまでは、川柳も来ている。自分が採った作品を、ほめそやすだけなら採らなかつた作品の欠点を指摘するより、はるかにやさしい。大体において、やさしいことにはあまり価値がない。

二五点のうち置き去りにされた二一点については、選者としての言い訳なり、励ましの言葉を掛けたいが、他の選者が採つていればかえって煩わしいものになろう。

ともあれ、これだけの作家、作品が集まると、現代川柳の長所も欠点も、おおむね俯瞰することができ。Z賞そのものの今回は、総体として可も不可もないといったところだが、十七年間のあいだには、確実に前進しており、これが現代川柳の側面的なバロメーターと考えてよろしいかと思う。

この価値ある賞が、川柳界の代表的イベントとして重みを増していくことを祈りたい。

自分の宇宙を持った作品を求めよう

佐藤 岳 俊

特選 広瀬 ちえみ

すーいすーいすーいすーいすーいすーいすーい
電球はあんなに高く切れており
塩をたっぷり振りかけ菜にしてあげる
夕暮れを細く刻んでチャーハンに
春風が通るおでこの釘の穴

広瀬ちえみさんの宇宙に、彼女の発見した言葉とユーモアがにじみでている。「すーいすーいすーいすーいすーいすーいすーい」にこの宇宙が出現している。そしてその底に恐ろしい自己凝視が光っている。

秀逸① 鎌田 京子

空っぽの箱を大事に持っている
新刊書の帯解く早咲きチューリップ
捨ててしまった手をごみ箱から拾う
ものがたり始まる瞬間湯沸器

日常の行為の中に、非日常の世界を創り出している。

「川柳は詩だ」と感ずるとき「詩は認識で

ある」と結論できる。鎌田京子さんの世界にはブルーの夜明けがある。

秀逸② 柴崎 昭雄

ところどころに灯りともして飯を食う
雨上りみないっせいにけもの貌に
足跡もけもののかたち冬銀河
ひまわりの影もはげしく呼吸せり

「飯を食う」時も「けもの貌」も「足跡」も「呼吸せり」も、柴崎昭雄の影をひきずっている。見落す息の中で、必死の歩がある。

秀逸③ 宮川 蓮子

むかし踊り子 浴浴と信濃川
ファックスで届く男の長い舌
リルケに拿捕されてすすきの波の上
カーンと秋天 人間を焼く臭い

宮川蓮子さんの作品に彼女のもつ風刺が跳ねている。そこでは自己の世界を自由に飛ばす姿が見てとれる。

硬質な表現に、エロスの形が流れるのを自覚している。

さて現代川柳はどんな方向へ流れているのだろうか。柄井川柳の選した「川柳集」と現代の作品と比べるとよい。柄井川柳は江戸の人間の姿と精神を求めた句を選んだのであった。私達は「自分」というものをいつ考え歩いているのか、それは「自分の宇宙」を持っている人のみが考え行動する姿だ。その中から川柳の一句が誕生し、自分の星として光り出すのである。心に残る一群を掲げたい。

ひまわりの黄からこぼれてゆく轍
この子に父母ありて雪光る
辛夷はらり微かに雪の匂いする
手袋をはめるわたしも暗殺者
その白さわすれぬようにと雪が降り
夜の木霊耳押さえても押さえても
いつまでも黙った雪が胸にある
赤ちゃんを抱いて男が散っていく
まな板に自分の音を持っている
肩籠を無人電車が通過する

弘子 眞里子 和香 れいこ 和尾 朱夏 三千子 千里 政良 忠兵衛

言葉の味わい

岡田 俊 介

今回もオリジナリティのある作品、思いや感動のある作品、言葉の発見特に味わいの発見を伴う作品、表現の新しさのある作品に焦点を当てて選考した。とは言っても、熱気を持ってさまざまな語りかけてくる作品群は、少し見方を変えるだけで選考順位の微妙な変化を余儀なくされる。年によって好不調の波ができることを、今回特に感じた。

秀逸以上に推した作家は、概して好調な作家であろう。大谷晋一郎さんを選選とし、山本三香子さん、板東弘子さん、岩崎眞里子さんを秀逸とした。

大谷晋一郎さんの作品の隅々にまで言葉を配り練り上げられた感覚には隙がなかった。彼の情景が独特のものであっても、作品の密度が伴い、その情景はフィクションに飾られている。このフィクションと現実の交差する世界こそが彼の世界なのである。「葬に会うあわだち草の黄の雫」の雫の部分の丁寧さが

持ち味なのだ。「行き交うは皆老いたりし冬鉄路」にしても、よくある情景ながら冬鉄路の句語一つで、句を引き締め且つ郷愁を漂わせる。言葉の使い方をよく知っている作家である。

山本三香子さんの柔軟な文体には汚染されていない清新さがある。思いの定着した作品は芯がとおり、柔らかなイメージが作品を包み込む。「蒼々と螢火にんげんの瞳を選ぶ」の螢火の蒼さをあざやかに蘇らせる思考方法にも、「密約や異国の雨を数えていたり」の雨を数える呼吸の長さが密約の深さに結びつく表現方法にも、斬新さが窺え、作品のレベルを押し上げている。

板東弘子さんの今回の作品には広がりがあり、確実に句境を拓いているようであった。「塔は傾き我がうたかたのランプを吊るす」に見るように常に寂しさを漂わせる。そしてこの寂しさの小さな変化を作品に潜ませ、

作品の香りにしている。「梟の羽はたぐ音は父の書斎」の梟の懐かしさも、この作家ならではの落ち着いた懐かしさである。

岩崎眞里子さんの雪景色は、重苦しい雪空に終わらずウイットを多分に含んでいる。「半分は祈り色した雪夫婦」に見られる夫婦像のシルエットは鮮やかだし、また「赤は緑を闇はところを光らせる」に見られるように言葉の対比が実に面白い。

桐越千繪さんの「蒼天の水蜜一個でのひらに」の新鮮な感覚の作品等は貴重な作品と認識している。更なる作品を期待したい。

その他、感銘を受けた作品を列挙したい。幻の花に逢いたしベルを押す 和香
逢えばまた深い目をする雪菩薩 はる香
黄の花を集めて葬送の朝よ れい子
いつかたどりつくルノアルの木陰 礼子
姿なきものにむかって皿を割る 裕子
わたし探しの原画 紀の川桃の村 節子
死者と吾れ隔つ一枚秋の玻璃 美恵
一本の糸になるまで笑いけり ちえみ
オカリナの調べに乗っていのち茫茫 トラキ
風の子が薫るすずらん小学校 雪洲
タオル絞ればサンフランシスコの霧 千里

ある選後感

片柳哲郎

今年のZ賞応募作品には、これから台頭するであろう現代作家の存在を確認した思いがあった。渡辺裕子、山本三香子、藤村沙耶、姫乃彩愛、榊原れい子といった方々で、これらの作家たちには既成作家にない玲瓏とした個性と、現代川柳に美の認識を持たれていると私は理解した。どのように文学思想が変遷して行っても信じられるのは美だけである。

一方、今回第一席に推薦した板東弘子氏の一連は、毎回の応募作品中最も優れたもので第三のイメージが展開されていた。横行する二物衝撃とは違う抽象の炸裂にまで思考が延びており、川柳の謎が迫る想いを持った。

狂に傾き今一灯の詩を拾う 弘子
ガラスの少女とく巻く一面菜の花は //

これなど川柳的な時間性が作品を積み込んでおり、気の一点にしぼりあげていることを覚える。想像の運動が見える秀作群であった。柴崎昭雄氏の作品については、昨年度まで

読者にとつての句語の予定調和が目立つたが今年度はこれを克服していた。

ひるがえりひるがえりして薄き胸板 昭雄
集中の白眉としたこの句なども、作者として妙な覚醒を強いていないし、なだれるような感応があつて、粗末に扱えなかった。自分だけの世界をこれほどまでに昇華した作者の労作を改めて称賛する。

大谷晋一郎氏の作品の内部には美への憧憬があつた。だが美には同時に魔性が見え隠れするものだ。その妖しさが川柳文学における美学だと思う。氏の本年度作品にはその、ほの暗さが散見され一句の独立性を覚えた。

蠟燭の こゆわらべ唄 晋一郎

折角の一連でありながら、その中の数句の無気力さが、評者の感動に水をかけ、冷めさせられることがある。遂に推せなかった方々の集中の秀作をここに挙げて顕彰させて貰う。

選後評（もうひとつの私の風景）

酒谷愛郷

今回のZ賞は、いつもの年の作品よりも、なにか全体的に精彩が無いように思えて、上位選出にも時間を要した。

特選 柴崎 昭雄

父はまた波と交わる神懸かり
父は子の梯子をはずす夏銀河
木枯らし鳴って父ごとく囚われる

秀逸 板東 弘子

錆針の先のたつきも錆色に
キーを鳴らせば月夜に遠い山ばかり
裸木に帽子を掛けたまま父は

秀逸 島 道代

姐の義弟（おとうと）ふいに寒晒し
護り仏居ませば風のコスモスに
花鉄夢を見るのも夢の中

秀逸 徳永 政二

袋から出して袋にしまう夜
朝からの水がこぼれてバスの中
夕焼けをひっぱっている鳥の数

個々の作家の置かれている原風景が、鮮明

であればあるほど、そのことが作品にも色濃く反映されて、読者の強い情趣を誘う反面、

「なきつくし青をつくして月下の影は」「炎天の影よ何かが尽きるまで」「秋雲の速き流れよごとりと木馬」昭雄作「縄電車もローカル線も哀しい村」「落ち椿のひとつが朱の火を熾す」「大夕陽 我が童心を返される」弘子作「終曲の乞うる時間を風家族」「風吹けば最後の歌も消えそうで」「壊れゆくもののへの折り灯をともし」道代作等には、叙情作家の抱く負の痛みや、創作意欲の弛みに見えることは、作者自らが留意して飽くまでも健気に起立する作家（もう一人の自分）であつて

はしく思う。

そんな中で今回上位に、徳永政二作品を得る事ができ、期待する若手作家「田村拓郎」等にもう一つの飛躍が見えることもあつて喜ばしいことであつた。

リターンキー押すなおすの針葉樹
はなびらのひとつひとつに仏の座
自販機を押す 木枯らしが一缶
厚きくちびる祖母から貰う桃の花
この世しか知らずに鐘が鳴っている
かくれんぼしながら老いる石の倉
くちべにを濃くうすくして何に飽く
時雨きて言葉すくなくに列れけり
魚跳ねる池などあればたずねゆく
木漏れ日をこよなく愛す こわれ者
空に半月 ワインの樽の胴ぶるい
人ひとり溶けてくもらぬ水鏡
微熱があつて薄いつ夕陽を飲まされる
水菜落ちてガラスの花開く
絵手紙にはみ出しそうなレモン一個
起重機に天はここまでピサの斜塔
好きな絵本配るおばさんの小窓
噴水が零れる行き交う人も零れて
永遠にボレロ奏でる助手である
枯れ草と交わる不意の金縛り
セロファンの中にさえすり閉じこめる

影踏みのひとつつづく ひとり言
トルソーが薫る五月はガラス玉
ちえみ
蓮子

このZ賞でも馴染の「西秋忠兵衛」氏の飄
乎たる作風とは異なる視点の軽い語り口に
ユーモアをも含有してこちよい。

「一輪の薔薇がコップの水を吸う」「こ
まりはこでまりとして風に揺れ」（政二）等
の作品になると、一見読者へ自由な想像の余
地を与えているようで、実は対象物のデッサ
ンの不足のように思えて、私には作品として
面白味は一つも湧いてこないが、今後に期待
したいものである。

その他の作品

沿線の仏と汽車へ瞬きす
精神の西のはずれでハゼを釣る
妻を安堵させる 肋骨の数
葱抜いた穴が連なり母がいらない
春の死者髪梳く姉の真似をして
こくらきを静かに抜けた朝なすび
点呼する一人は鳥になったのね
大声で呼び合うための防波堤
やんごとなき母の願いの死化粧
祭壇は満員散歩してよう
春の街を猫の気分で歩いている
わが膝にわが顎乗せて落着くや

晋一郎
忠兵衛
三八朗
千里
りつ子
眞里子
れいこ
三千子
はる香
朱夏
千繪
乃理子

予後の中で

細川不凍

Z賞の選に入る前に、四度目の入院生活を半月程送った。その間なかなか熱が抜けなかったこともあって、川柳には一切タッチせず、一冊の小説のみ読み了えた。芥川賞作家南木佳士の「阿弥陀堂だより」である。他者の痛みを自己の痛みとして受け容れることのできる人達の、生きる希望の湧く物語である。

僕が初めて生きる希望を覚えた川柳作品は「孤独にはあらず歩めば月歩む」(東田木念人)である。この句、17歳からの四年間の入院生活を精神的に支えてくれた。近頃は世紀末や生活環境問題を反映してか、暗いムードの句が多く、生きる希望を与えてくれる川柳作品は少なくなったような気がする。

〈特選〉藤村 沙耶

くちびるに風花ありて震える過去
臙夜に佇つ道行きのかたちして

やわらかき薔薇の芽があり宥される

作品30句から、作者独自の美意識が匂い立

つようだ。美意識を見事に昇華させたその伎倆もさる事ながら、悠々たる時空と繊細な感性を併せ持つ作者の、物語性を宿した艶やかなる世界には魅きつけられること大だった。

〈秀逸①〉大谷晋一郎

風花の荒田をおとこ舞う日なり

迎え火に茄子が動いただけのこと

いよいよ自己の世界に達着した感のある30句を呈示してくれた。どこことなく泥臭さを曳きずりながらの屈折した諧謔性は、土着性の匂いを醸し出している。風土が体に染みこんでいるからであろう、作者の視線はやさしい。

〈秀逸②〉岩崎眞里子

君は麦わたしは大豆 今朝の霜

抱きしめていよいよ清し冬の双腕

明快で歯切れの良い30句だ。人間探求派的な暗さがない点、現実の把握において一面的になり易い欠点を持つが、それを超える生の歎びの表現は特筆すべきだ。作者の性情から

して暗く内攻するよりは明るく跳ぶ方がいい。

〈秀逸③〉小杉 美恵

水に手を入れてさみしきものに触れ

落日へ刷り上げてゆく生一卷

かなしみが揺曳する30句。時にその言葉選びの嫺々が表現をなよつかせることもあるが、さりげなく詠まれた抒情句の中に、生きるという時間の一刻一刻が眩と刻まれている。個は孤であるという認識の一刻一刻でもある。

〈佳作十二氏〉特選、秀逸に劣らぬ力量を感じた。殊に自己の生を淡々と表白した白藤海作(但し「私」の多用は戴けない)に強く共感した。最後に選外からの感銘句を、

うしろから俵せなんか来はしない
月満ちて馬の呼吸を書き留める

古代舟沖へ沖へと姉連れ

水かげろうほどの誠実不誠実

約束は反古に通過駅の風

あやとりは続きをせんと花遍路

こめかみに漂泊中の雨・霰

精神の西のはずれでハゼを釣る

木枯らしを又生む少女のピアノソロ

さくら注ぐのんどの奥の灯るまで

血脈は透きとおるようにわが樞

三香子

奥の羽ばたく音は父の書斎

〃

寝たらしいずっしり重くなる背中

ほんのりと悔いに似た味ふきのとう

〃

子がいやがむ場所じゃがんでみる散歩

〃

声が生まれる一面の蕎麦の花

傾きがあつて雫の音がする

〃

笑わない人が作ったぬいぐるみ

〃

佳作に推した人の作品の中から。

主婦という人妻という大首絵

千里

精神の西のはずれでハゼを釣る

忠兵衛

蟹の泡あれば呪文でできている

乃理子

言いかけて止めるお地蔵さんは石

礼子

老眼鏡拭いて坊っちゃん読み直す

小吉

夕焼けをひっぱっている鳥の数

政二

門のない家にも春がやってくる

すみこ

天守閣から雑兵が見えますか

鏗

選後感

八坂俊生

以前、川柳平安の大会で「言葉より思いが先」という短い話をしたことがあった。今もこの考えは変わらないけれども、その「思い」が問題だと思ふようになった。

川柳は自分の思いを表現するもの、という考えが定着した結果、川柳に情に流される傾向が出てきたことや、「私川柳」というべき作品が増えてきたことなどである。

情に流されるというのは、自己の思いを距離を置いて見ることをせず、ひたすら思いの丈を表現しようとするところから来るのである。自己の思いと、そんな思いを抱いている自分を客観的に見詰める目があれば、もつと違った自分や自分の思いが見えてきて、情に流されることもなくなると思う。

「私川柳」というべき作品についてもそれは言えることで、自己を客観的に見据えて作られた作品にはその人の個性が生きている。ともあれ、自己の「思い」を見なおすこと

が今の川柳に必要なのではないか。

表現について言えば、川柳における詩とは何か、という問いを問いつける必要があるようだ。詩は言葉を飾ることから生まれるものではないし、俳句や短詩の方法論によって川柳が川柳という詩になるのではないと私は思っている。

こんなことを思いながら選を終えた。

結果は、特選に白藤 海作、秀逸①に板東弘子作品、秀逸②に鷺谷美津子作品、秀逸③に峯裕見子作品となった。

副作用いっぱい聴いてのむ葉 海

ベッドの上で日に育っていく覚悟 〃

あかつきの始発電車の音愛す 〃

どの人もスリッパ捨てて退院す 〃

ここは戦場 生きて脱出するところ 〃

〃

鶴が来る屋根かも月光に沈む 弘子

てのひらに水を集めて水になる 〃

つみき

〃

明良
恒雄
茂生

受賞の言葉

柴崎昭雄

ここ一年半ほど、支援組織の応援を得て、パソコンを使つての在宅就労の勉強を続けて来ました。殆ど独学に近いために川柳との両立は苦しくもあり、川柳に身が入らないことも多くありました。そんな中で今回のZ賞の受賞は何よりの大きな励みとなりました。

SOHO（スモールオフィス・ホームオフィスの略）という、少人数による仕事グループでは、会社という器がないだけに個の存在が大きく、より強く個をアピールしなければやって行けません。そう言う意味では川柳という表現手段と共通するところが多く、自分を表現しなければなりません。経済的な自立を目指す目的もあるのですが、それに伴って精神的な面でも鍛えられている状況です。

これからは更に表現者として誇りを持てる自分であるように精進したいと思っております。ありがとうございました。

道案内

板東弘子

川柳をしながら川柳人とあまり深い関わりを持っていない。いや持てないのかも知れない。自身の不器用さがそうさせるのだろう。

小さな山ひとつ隔てた辺りで心を遊ばせている。川柳を実家としながら家出人の様相だと知人は笑う、何故それ程までに保守的になる必要があるのだろうかと考えているのだが積極性を母の胎内に忘れて来たのかも知れぬ。

人は常に何かを欲している筈であり、私の「Z賞参加」も真にそれであつたように思う。

三十句を作り揃える作業は、その作品を通して一年間を振り返ることでもあり、私の心の中を覗く事が出来る時間でもあつた。しかし提出した作品を見た時、昨年も一昨年何も変わってないことに気付く、知人に話すと、「人間なんて変わりが無いのだから、現在の心の有り様を詠めばいいのでは」と励まされての「風炎賞」をかみしめている。

何から逃れようとしている私への道案内なのだろうか。皆様にご感謝申し上げます。

橋高薫風選

特選	山本 磯	京都市
秀逸	白藤 海	西宮市
秀逸	樋口 仁	四日市市
秀逸	板東 乃理子	加古川市
佳作	瀧 正治	相模原市
佳作	榊原 れい子	姫路市
佳作	榎原 公子	和歌山市
佳作	情野 千里	姫路市
佳作	岩崎 雪洲	黒石市
佳作	鷺谷 美津子	秋田市
佳作	松田 京美	熊本市
佳作	峯 裕見子	大津市
佳作	渡辺 和尾	愛知県
佳作	川本 畔	松江市
佳作	東川 和子	伊勢市
佳作	小杉 美恵	夕張市

寺尾俊平選

特選	樋口 仁	四日市市
秀逸	徳永 政二	守山市
秀逸	板東 弘子	香川県
秀逸	坂東 乃理子	加古川市
佳作	木本 朱夏	和歌山市
佳作	峯 裕見子	大津市
佳作	大橋 政良	砂川市
佳作	渡辺 和尾	愛知県
佳作	柴崎 昭雄	青森県
佳作	西秋 忠兵衛	八千代市
佳作	福力 明良	岡山県
佳作	岩崎 眞里子	黒石市
佳作	伊藤 紀子	札幌市
佳作	なかはら いこ	名古屋
佳作	宮川 蓮子	新潟市
佳作	情野 千里	姫路市

吉田健治選

特選	柴崎 昭雄	青森県
秀逸	なかはら いこ	名古屋
秀逸	斉藤 はる香	小樽市
秀逸	峯 裕見子	大津市
佳作	西秋 忠兵衛	八千代市
佳作	広瀬 ちえみ	仙台市
佳作	徳永 政二	守山市
佳作	坂東 乃理子	加古川市
佳作	渡辺 裕子	北海道
佳作	横澤 あや子	八戸市
佳作	八戸 むさし	青森県
佳作	伊藤 紀子	札幌市
佳作	樋口 仁	四日市市
佳作	情野 千里	姫路市
佳作	山本 忠次郎	東京都
佳作	瀧 正治	相模原市

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	酒谷愛郷選		佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
なかはられいこ	岩崎眞里子	みとせりつ子	情野千里	神谷三八朗	西秋忠兵衛	大谷晋一郎	徳永政二	島道代	柴崎昭雄	青森県	青森県	佐藤幸子	姫乃彩愛	木本朱夏	みとせりつ子	伊藤紀子	桐越千繪	榊原れい子	榊原れい子
名古屋市	黒石市	高松市	姫路市	名古屋市	八千代市	高松市	守山市	青森市	香川県	青森市	青森市	札幌市	豊中市	和歌山市	高松市	札幌市	北海道	姫路市	姫路市

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	細川不凍選		佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
広瀬ちえみ	島道裕子	渡辺裕子	木本朱夏	伊藤紀子	柴崎昭雄	白藤海	なかはられいこ	高鶴礼子	小杉美恵	岩崎眞里子	大谷晋一郎	藤村沙耶	大谷晋一郎	坂東乃理子	桐越千繪	木本朱夏	斉藤はる香	吉田三千子	吉田三千子
仙台市	青森市	北海道	和歌山市	札幌市	青森県	西宮市	名古屋市	和光市	夕張市	黒石市	高松市	豊中市	豊中市	加古川市	北海道	和歌山市	小樽市	名古屋市	名古屋市

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	八坂俊生選		佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
斎藤茂生	重森恒雄	福力明良	加藤明良	竹内すみこ	徳永政二	島田小吉	高鶴礼子	坂東乃理子	西秋忠兵衛	情野千里	峯裕見子	鷲谷美津子	板東弘子	白藤海	姫乃彩愛	福力明良	宮川蓮子	宮川蓮子	宮川蓮子
青森市	彦根市	岡山市	静岡市	松江市	守山市	東京都	和光市	加古川市	八千代市	姫路市	大津市	秋田市	香川県	西宮市	豊中市	岡山市	新潟市	新潟市	新潟市

秀逸	秀逸	特選	佐藤岳俊選		佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	尾藤三柳選	
柴崎昭雄	鎌田京子	広瀬ちえみ	佐藤岳俊	佐藤岳俊	山本忠次郎	斉藤はる香	加藤かずこ	谷沢けい子	木本朱夏	広瀬ちえみ	伊藤紀子	桐越千繪	なかはられいこ	藤村沙耶	渡辺裕子	神谷三八朗	樋口仁	情野千里	尾藤三柳
青森県	仙台市	仙台市	仙台市	仙台市	東京都	小樽市	札幌市	新潟市	和歌山市	仙台市	札幌市	北海道	名古屋市	豊中市	北海道	名古屋市	四日市市	姫路市	姫路市

佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	岡田俊介選		佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸
木本朱夏	辻村みつ子	島道代	岩崎眞里子	板東弘子	山本三香子	大谷晋一郎	岡田俊介	岡田俊介	西秋忠兵衛	大橋政良	情野千里	吉田三千子	岩崎眞里子	木本朱夏	渡辺和尾	なかはられいこ	あべ和香	板東弘子	宮川蓮子
和歌山市	岡山県	青森市	黒石市	香川県	高知県	高松市	高松市	高松市	八千代市	砂川市	姫路市	名古屋市	黒石市	和歌山市	愛知県	名古屋市	花巻市	香川県	新潟市

佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	片柳哲郎選		佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
藤村沙耶	野々圭子	山本三香子	岩崎眞里子	渡辺裕子	島道代	大谷晋一郎	柴崎昭雄	板東弘子	片柳哲郎	松田悦子	横澤あや子	姫乃彩愛	柴崎昭雄	宮川蓮子	田村拓郎	桐越千繪	野々圭子	野々圭子	野々圭子
豊中市	和歌山市	高知県	黒石市	北海道	青森市	高松市	青森県	香川県	香川県	札幌市	八戸市	豊中市	青森県	新潟市	土佐市	北海道	北海道	北海道	和歌山市

川柳Z大賞受賞者

- ①第1回 昭和58年「1982（昭和57）年度」 細川 不凍（北海道）
 ②第2回 昭和59年「1983（昭和58）年度」 酒谷 愛郷（伊万里市）
 ③第3回 昭和60年「1984（昭和59）年度」 古谷 恭一（高知市）
 ④第4回 昭和61年「1985（昭和60）年度」 西 山茶花（岡山市）
 ⑤第5回 昭和62年「1986（昭和61）年度」 海地 大破（高知市）
 ⑥第6回 昭和63年「1987（昭和62）年度」 桑野 晶子（札幌市）
 ⑦第7回 平成元年「1988（昭和63）年度」 金山 英子（神戸市）
 ⑧第8回 平成2年「1989（平成元）年度」 長町 一呎（岡山市）
 ⑨第9回 平成3年「1990（平成2）年度」 西条 真紀（岡山市）
 ⑩第10回 平成4年「1991（平成3）年度」 加藤 久子（岩沼市）
 ⑪第11回 平成5年「1992（平成4）年度」 石部 明（岡山市）
 ⑫第12回 平成6年「1993（平成5）年度」 吉田 浪（岡山市）
 ⑬第12回 2作家 荻原久美子（東京都）
 ⑭第13回 平成7年「1994（平成6）年度」 渡辺 和尾（愛知県）
 ⑮第14回 平成8年「1995（平成7）年度」 金山 英子（神戸市）
 ⑯第15回 平成9年「1996（平成8）年度」 樋口由紀子（姫路市）
 ⑰第16回 平成10年「1997（平成9）年度」 清水かおり（土佐市）
 ⑱第17回 平成11年「1998（平成10）年度」 柴崎 昭雄（青森県）

風炎賞受賞者

- ①第1回 平成5年「1992（平成4）年度」 荻原久美子（東京都）
 ②第2回 平成6年「1993（平成5）年度」 佐藤 岳俊（岩手県）
 ③第3回 平成7年「1994（平成6）年度」 なかはられいこ（名古屋市）
 ④第4回 平成8年「1995（平成7）年度」 柴崎 昭雄（青森県）
 ⑤第5回 平成9年「1996（平成8）年度」 梅崎 流青（柳川市）
 ⑥第6回 平成10年「1997（平成9）年度」 木本 朱夏（和歌山市）
 ⑦第7回 平成11年「1998（平成10）年度」 板東 弘子（香川県）

【歴代選考委員】第一回～十七回

大 細 柴 杉 山 奥 泉 岸 時 片 尾 寺 橘
 野 川 田 野 村 室 本 実 柳 藤 尾 高
 風 不 午 草 数 淳 吟 新 哲 三 俊 薫
 柳 凍 朗 兵 祐 市 夫 一 子 郎 柳 平 風

（新）（北）（島）（青）（東）（東）（福）（大）（兵）（神）（東）（岡）（大）
 （潟）（海）（根）（森）（京）（京）（岡）（阪）（庫）（奈）（京）（山）（阪）
 （道）

西 佐 工 八 岡 高 岩 酒 桑 吉 田 森 福
 条 藤 藤 坂 田 田 村 谷 野 田 口 中 島
 眞 岳 寿 俊 俊 寄 憲 愛 晶 健 麦 恵 眞
 紀 俊 久 生 介 木 治 郷 子 治 彦 美 澄

（岡）（岩）（青）（香）（大）（青）（京）（佐）（北）（東）（熊）（大）（東）
 （山）（手）（森）（川）（阪）（森）（都）（賀）（海）（京）（本）（阪）（京）
 （道）

（入選句集をお送りいたします。）

第18回川柳Z賞作品応募要領

【応募作品】 創作30句を12組（10名の選者・事務局・校正用）

1999（平成11）年発表作品か未発表作品（原則）

【締 切】 2000年1月31日消印まで（☆応募者名簿は発表しません）

【選考委員】

細 川 不 凍（北海道）	佐 藤 岳 俊（岩 手）
尾 藤 三 柳（東 京）	吉 田 健 治（東 京）
片 柳 哲 郎（横 浜）	岡 田 俊 介（大 阪）
橘 高 薫 風（大 阪）	寺 尾 俊 平（岡 山）
八 坂 俊 生（香 川）	酒 谷 愛 郷（伊万里）

【応募用紙】 B4専用紙。ワープロの方は専用紙に準じて下さい。用紙の必要な方は、返信用封筒を同封の上事務局まで。専用紙以外（や感熱紙）での応募はご容赦下さい。

【参 加 費】 不要です。が、入選句集希望の方は¥1,500（送料発行所負担）を振替など（切手・券不可）でお送り下さい。

【速報・5月予定】

参加者で希望の方は、受取人の住所氏名入り返信用官製（に限ります）ハガキを応募時に同封して下さい。

【 賞 】 大 賞	津軽塗り記念楯（副賞15万円）	1 名
風災賞	（奨励賞として）津軽塗り記念楯	1 名
優秀賞	Z賞テレカ	若干名

【送付と問い合わせ先】

030-1303 青森県蟹田町 145

川柳Z賞事務局 TEL・FAX 共0174-22-3537

【振替口座名】 川柳Z賞 【口座番号】 02350-5-2718

★Z賞テレカ（50度）を¥1,000（送料共）でお頒けしています。FAXまたはハガキで申込み下さい。



※無断転載をご遠慮下さい。

第十七回川柳Z賞入選作品集

発行日 一九九九年八月十五日

編集人 高 野 通

発行人 南 田 寄生木

発行所 川柳Z賞選考委員会

〒〇三〇一三〇三 青森県蟹田町一四五

電話 〇一七四二二三三七（FAX共）

振替 一、五〇〇円（送料発行所負担）

口座 川柳Z賞

印刷所 〇二三五一五二七一八

住所 青森市大字幸畑字松元六二一三

TEL 〇一七七（三八）二〇二一

【事務局より】

選考委員の皆様のご尽力、応募の方々の協力を得まして第17集が出来ました。厚くお礼申し上げます。◆編集・校正を今年も南野・山田・岩崎さんご夫妻のお世話になりました。併せてお礼申し上げます。◆この賞は当時遅れていた北の作品のレベルアップの目的で創設しました。広いご支援を得まして目的を少しずつ果たして参りましたが、17年目で地元からZ賞作家が生まれました。理屈抜きに嬉しいです。◆回を重ねるに連れこの小冊子が勉強会にも使われるようになってきました。変わらぬご協力を得て続けてゆきたいと思えます。（杉野草兵）